
古代アメリカ学会会報

第41号



ホンジュラス、エル・プエンテ遺跡 ©川村悠太

目次

◆会長あいさつ	1	◆会員の受賞	16
◆第11期役員紹介	2	◆第21回研究大会報告	16
◆会員からの寄稿	2	◆第21回研究大会特別シンポジウム報告	26
◆特集：フィールド調査体験記II	8	◆事務局からのお知らせ	28
◆学会協力事業の報告	14	◆編集後記	29
◆第5回西日本部会研究懇談会の報告	15		

2017年1月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

会長就任にあたって

関雄二（古代アメリカ学会第 11 期会長）



第 10 期に引き続き、第 11 期の会長に就任いたしました関雄二です。第 10 期ではさまざまな学会業務に取り組んできました。ご存じの通り、メールニュースを新設し、迅速かつ確実に会員からの情報を届ける仕組みを整備しました。また国外に在住する会員の会費支払いを容易にするため、Paypal の導入を決め、さらに、学会設立当初より運営に貢献してくださった会員にはシニア会員の制度を設けることで、定年後も大所高所から助言をいただけるような体制を整えました。これらに加え、会員の中から現役の高校教員に参加を仰ぎ、中等教育における学会の役割を検討してきました。

いずれも第 10 期の就任時に、会員の方々に私の目標として掲げた項目に関わることばかりです。このため、役員の方々には業務負担が増加するなどご迷惑をおかけしてしまいました。改めて深謝いたします。

さて第 11 期ですが、基本的には第 10 期でかかげた 3 つの目標を引き続き追求していきたいと考えています。一つは、会員の研究を支える体制の充実です。研究大会、研究懇談会、そして会誌のよりいっそうの充実を図っていきます。

もう一つは国際化です。これは、現在の学会の体力を考えるとなかなか難しい問題です。私がよく口にする「身の丈にあった」形で、何が可能なのかを考えていきます。

そして最後の普及という問題も、今期の重要なテーマと考えています。たとえば、中等教育においても、アメリカ大陸の古代文明研究が現在置かれている我が国での環境は、ますます厳しくなっています。世界史未履修問題に端を発する高校における歴史教科書の問題は、世界史の必修をやめる代わりに、日本史と世界史を組み合わせた新しい科目「歴史総合」を設け、2022 年から導入することで決着をみようとしています。

ここでは、近現代史に力が置かれ、日本とその周辺諸国との関連で歴史をとらえるということが強くうたわれています。自ずと、古代、先史部分はこれまで以上に教育の射程から外れていく傾向は強まるでしょう。

この状況下で私たちの学会としても手をこまねいてばかりはいられません。具体的な対応は今期の役員会においてもワーキングで議論していただくつもりではありますが、教育における大きな流れを止めることができないのであるならば、その土俵に上がりながら方策を考えるべきかと思えます。

個別の歴史が有機的につながっていたと考えるグローバル・ヒストリーが、歴史総合の意図するものだとするならば、グローバル化の先駆けである大航海時代におけるアメリカ大陸で起きた征服や探検を前面に出し、その中で現代社会にまで連続する問題を抽出すること、そしてその問題を解くためにもアメリカ大陸の古代文明に目を向ける必要があることを主張するのも一つのありかたでしょう。

是非、会員の方々には、自らの教育現場において工夫されたアイデアを他の会員と共有していただきたいと考えます。そのためには、研究大会、懇談会、あるいは会報など利用してほしいと思えます。

そしてもう一つ、古代文明自体は、これまでその研究を推進してきた日本や欧米各国だけのものであった時代は終わったという認識を持つことも必要です。古代文明は、今やそれが存在する地域や国にとって重要な文化資源、経済資源となっています。またその利用の方法によっては、激しい対立を生み出す政治資源にもなります。いいかえれば、古代文明の利用は、すぐれて現代的な課題でもあり、旅行者が関心を寄せる趣味的な対象から、教育の中でも真剣に論じるべき存在へと変貌しつつあります。

いずれにしても、古代文明をめぐる世界は懐が深く、魅力を持っています。私たち学会は、研究のおもしろさ、魅力と同時に、総体としての古代文明の姿を、教育、出版、講演、ウェブなどさまざまな手段を通して学会外の社会に訴えていくことを目指すべきなのではないでしょうか。

どこまで今期でこれが可能かはわかりませんが、皆さんと手を携えて、事態を打開していきたいと考えています。是非ご協力ください。

第11期(2017.1.1~2018.12.31)の役員紹介

先述のように、選挙結果と関雄二新会長の任命により、第11期役員が決定しました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会長 関 雄二 (国立民族学博物館)
代表幹事 坂井 正人 (山形大学)
監査委員 青山 和夫 (茨城大学)
鶴見 英成 (東京大学総合研究博物館)
事務幹事 山本 睦 (山形大学)
事務幹事補佐 松本 剛 (山形大学)

運営委員

会計 土井 正樹 (山形大学)
編集 大平 秀一 (東海大学)
杓谷 茂樹 (中部大学)
平尾 雅代 (金沢大学大学院博士課程)
広報 南 博史 (京都外国語大学)
研究 渡部 森哉 (南山大学)
会報 小林 貴徳 (関西外国語大学)
福原 弘識 (埼玉大学ほか非常勤)

会員からの寄稿

● 「2016 エクアドル地震」と博物館

大平秀一 (東海大学)

2016年4月16日18時58分(現地時間)、「2016 エクアドル地震」が発生した。マナビ県北端部を震源地とするマグニチュード7.8の大きな揺れは671名の命を奪い、海岸部に甚大な被害をもたらした。

2016年9月2日~15日、「『2016 エクアドル地震』による文化財被害の実状把握」のための調査を実施した(主催:国際交流基金、共催:在エクアドル日本国大使館、協力:文化遺産国際協力コンソーシアム)。目的は、被害状況を把握して情報・問題の共有化を図り、日本による支援の可能性の模索に向かうことであった。滞在期間中、計14の博物館・関連施設を訪れ、状況を聞き取った。

最初に訪れた北海岸・エスメラルダス博物館(国立)の展示室を見て目を疑った。被災当日の状況が、そのまま保持されていたのである。責任者によれば、保険の問題が絡んでいるのだという。ケースの中で、大勢の人々に見つめられてきた先住民の生きた証が、ぐちゃぐちゃに壊れている。やり場のない気持ちになった。責任者も"Feo, me siento feo" (痛ましい)と、ため息をつきながら戸惑い、同じ気持ちを繰り返していた。

この博物館の展示は、ケース内が重層構造になっており、上層の展示台には上から吊り下げられたガラス板が用いられていた。そのガラス板が割れて展示物がすべて落下し、下層の展示物に衝突・破損した事故が多く認められた(写真1,2)。また展示物の転倒・破損、そして細長くてバランスの悪い展示台の転倒も目に付いた。展示総数516点の約2~3割



写真1 エスメラルダス博物館 展示物の落下・破損



写真2 エスメラルダス博物館 展示物の落下・破損

は被災したように思われる。

中央海岸に位置するマンタ博物館(国立)にも、被災当日の状況が同じ理由で保持されていた。この博物館では、展示物の転倒・破損に加えて、展示ケースそのものが転倒し、展示物がケースもろとも大破していた(写真3,4)。中には、キャストが固定されておらず、2m近く動いた末に転倒した展示ケースも認められた。



写真3 マンタ博物館 展示ケースの転倒



写真4 マンタ博物館 展示ケースの転倒と破損



写真5 バイア・デ・カラケス博物館 被災状況



写真6 バイア・デ・カラケス博物館 移転先のない所蔵品（左下：飛び散ったガラス）

マンタ市の北方約 50km に位置するバイア・デ・カラケス博物館（国立）では、建物も大きな被害を受けていた。窓ガラスが割れて外壁に穴が開き、構造的問題も生じて現在は立入禁止となっていた（写真5）。展示室には、グアヤキルの人類学・現代芸術博物館（MAAC [国立]）から借り受けた 491 点の遺物が展示されていたが、すでに撤収されていた。撤収を担当した文化遺産庁（INPC）の考古学者は、被災数を約 30% と見積もっていた。建物の被災状況をみると、展示物の被害が意外に少ない。おそらく、壁に埋め込まれた展示ケースの利用が功を奏したと思われる。この博物館は、独自に約 3300 点の考古遺物を所蔵している。これらは移転・避難先がなく、立入禁止の危険な建物の中にそのまま保管されていた（写真6）。

この他、ハマ博物館（町立）で展示品約 500 点の内の 50% 前後、MAAC で約 30 点が被災している。今回訪問した博物館だけでも、概算で 500 点前後は被災したと想定される。ただし帰国後に、震源地に近いペデルナレス市のプライベートコレクション 2000 点が被災したという情報を得ているので、全体の被害総数はおそらく数千点に及ぶと思われる。

文化財被害への対応は必ずしもスムーズには進んでいない。世界全体の 1/10 の地震が起きる日本ですら、システムティックな「文化財レスキュー」がなされるのは、1995 年以後のことだから、さほど驚くに値しない。地震災害への経験が少なく、戸惑っているというのが実状であろう。とはいえ、対応の遅れに作用していると思われる様々な問題があることもまた確かなようだ。まずは考古学者や保存科学の専門家の数が、極端に少ない。被害が集中している、四国四県ほどの面積をもつマナビ県の INPC には、考古学者が 1 名しか配されていない。これでは対処が不可能である。考古学や人類学を体系的に学べる大学は限られており、就ける仕事が少ないため、学んでいる学生も少ない。

組織的な問題もおそらくはある。2007 年に左派のラファエル・コリア政権が誕生し、翌年新憲法が制定された。その第一条には、エクアドルが異文化間・多民族の権利と公平を尊重する国家であることが明記されている。織り成される文化の多様性は、当然スペイン侵入以前の歴史にまで遡る。その歴史は文字なき民が担ってきたもので、モノで語られまた示されることになる。このとき、博物館は国家のおかれた社会的様態を再確認させる重要な役割を果たし

得る。こうした理念に基づき、エクアドルの国立博物館は旧体制から再編が進められた。

かつてエクアドルの文化財行政は、中央銀行（Banco Central）／中央銀行博物館（Museo del Banco Central）が中心になって進められてきた。いわば日銀が文化財行政を担うことに等しいので、少し首を捻ってしまう。しかしその歴史をみると、話しはそう複雑でもない。20世紀前半、米国にエドウィン・ケンメラーという経済学者がいた。貨幣・金融問題を専門とするケンメラーはマネー・ドクターの異名を持ち、金本位体制に基づく通貨安定を主張し、各国に通貨を管理する「中央銀行」の必要性を説いて回った。アンデス地域には、コロンビア（1923）、チリ（1925）、エクアドル（1926～27）、ボリビア（1927）、そしてペルー（1931）にミッションが送られ、彼の助言に基づいて各国は中央銀行を設立していく。金本位体制において、各国の紙幣量は金の保有量に制約されてくる。当然その国家は、自国がもつありとあらゆる金に目を向け、必然的に考古遺物の金製品もその対象となる。エクアドルの場合、1927年に中央銀行が設立され、その活動が次第に始まっていった。

しかし40年代半ばを過ぎると、集めた考古遺物を保存しようとする動きが出てくる。60年代に入る頃には、蓄積されてきた収集品に個人の所蔵品も加わって博物館の設置が構想され、準備が進んでいく。こうして1969年、キトの中央銀行に博物館が開館される。70年代に入ると、グアヤキルにも博物館が設置され、同時に収集行為も急速に拡大していく。

30年代～70年代になされた遺物の収集には、直接・間接を問わず、盗掘・遺物の売買が随伴している。現在の法律において、盗掘はもちろん違法である。しかし歴史の過程では、国家の動態と盗掘が連動し合っていた様子がみてとれる。個人コレクションも加わったとはいえ、現在、国立博物館が所蔵する10万点を遥かに超える考古遺物の多くは、こうして収集されたものである。もちろんこれは歴史にすぎない。現在の国家・政府は、国外に不法で持ち出された大量の遺物を、大変な努力の末に取り戻している。

ケンメラーのミッションがアンデスにやって来た時期は、偶然にもインディヘニスモ（先住民主義…先住民擁護の思想）が興隆し始める時期と一致している。ラテンアメリカ・アンデス諸国における博物館の設置・整備・発展の歴史に、国家の独自性の模

索・構築、換言すれば当時の人口の4割以上を占める先住民の存在とその歴史を問い直す行為が深く関与しており、それと並行して考古学や人類学も進展していくことはこれまでも指摘されてきた。一方で、ケンメラーの影響をめぐる議論は、限定的なように思われる。

70年代以後、中央銀行は、潤沢な予算で考古学者の調査・研究も支援しはじめる。1978年には文化遺産庁（INPC）が設立されるものの、中央銀行は文化財行政の中心であり続けた。1980年には南高地のクエンカにも新たな博物館も設置され、80年代にはエクアドルの考古学・中央銀行博物館は活性化していく。ところが90年代に入るとその支援は次第に遠のき、90年代末の経済危機・2000年のドル化を経て、中央銀行博物館は単なる展示・保管の場へと変化していった。

そしてコレア政権以後、文化遺産省社会記念碑局（Subsecretaría de Memoria Social）の管轄下におかれた国立博物館は、市民参加型の複合文化施設へと再編され、名称も"Museo y Centro Cultural"（博物館・文化センター）と変更された。多文化主義に基づく国家が、文化の多様性理解のために博物館・所蔵品を積極的に活用しようというのだから、極めて理にかなっている。実際に、各地の博物館では多様な催しもなされ、多くの市民・子供たちが利用している。"Red de Museos"（博物館ネットワーク）の仕組みも構築され、文化資源を最大限に有効活用しようとする意欲がみてとれる。

一方で、活用の意識が高すぎたためか、その前段階として必要不可欠であるはずの調査・研究行為が、おろそかにされてしまった感が否めない。キトの文化遺産省とグアヤキルのMAACを除けば、地方に配された各博物館には、考古学者や保存科学等の専門家は不在である。

新たな門出を切った国立博物館が、地震により大きな被害を受けてしまった。残念ながらこの緊急時には、"Red"（ネットワーク）がほぼ機能していないし、専門家不在が故に対処・対応に苦慮している。ここで文化財被害への対応にしっかりと目を向けなければ、文化財は単に都合よく利用される物体にすぎないということになり、土から掘り出されてきた過程とさほど違いのない位置づけとなってしまう。この危惧を煽るかのように、被災地のマナビ県では、地震以後に盗掘が急増しているという。

「2016 エクアドル地震」による文化財被害は、

「発見」・「征服」、そして植民地化の歴史を経てきたラテンアメリカにおいて、「文化財とは何か（≒先住民史とは何か）」という問題を強く問いかけているように思えてならない。もちろん学術の世界において、資料の蓄積・分析は社会情勢とは無関係に意義深いものとはいえ、これは現代社会に生きる我々研究者が先住民史を明らかにする意義は何か、という問いかけとも呼応し合うものであろう。エクアドルの政府関連組織・担当者は、限られた人数で、可能な限り頑張っている。歴史の過程において、おそらくアンデスに匹敵するような文化の多様性があり、そして地震被害の経験豊かな日本が、何らかの手を差し伸べ、文化財の本当の意味を相互に思考し合っていく意義は少なくないだろう。

●古代アメリカ文明史の高校授業改善 —教科書記述の検討から教科研究へ— 多々良 穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）

先コロンブス期の古代アメリカ文明は、従来の「四大文明」とは異なった環境で独自に発展した文明であり、古代文明が一様ではないことを理解する上で、高校教育にとって重要である。しかし、古代エジプト文明などとともに「謎と神秘の文明」として同じようにとらえられがちなのは、以前から指摘している通りである（多々良 2001, 2002 など）。

それを改善する一つの方法として、筆者は高校世界史教科書の表現が正確になるように記述内容を検討し始めた。それは、2004年に吉田栄人の科研報告「日本におけるマヤ・イメージの実態」（吉田 2005）において、高校生に対するアンケート調査に協力した12年前に遡る。吉田は当時出版されていた中学校の歴史・高等学校の世界史の全教科書に記述されているマヤ文明の項目をデータ化していた。筆者はそのデータの使用許諾を吉田から得て、教科書記述に関する研究を進めてきた（多々良 2005, 2007）。その後、高等学校の世界史教科書の記述内容を本格的に分析し、当時使用されていた世界史高校教科書（世界史A13種類、世界史B11種類）に載っていた、マヤ文明を含む古代アメリカ文明の記述について改善すべき箇所を明らかにした（多々良 2009, 2010, 2012 など）。これら一連の教科書記述に関する研究を通じて、教科書の出版社に修正を働きかけたり、高校教員に授業方法を提示したりする必要があることがわかった。しかしここまでは個人レベル

での研究であり、教科書会社の営業員に修正箇所を指摘したり、教員対象の研究会等で修正箇所を提示したりすることはあっても、実際に教科書会社全体に修正案を提示する動きには至らなかった。

その後、2008年に古代アメリカ学会において「学術情報の普及に関わる戦略ワーキンググループ（以下WG）」が発足し、高等学校教科書問題をはじめマスコミ報道の改善と対応、研究成果の一般社会への還元などを検討し始めた（青山他 2009）。翌2009年には古代アメリカ学会において「学術情報の普及に関わる戦略検討班」が発足し、WGから検討課題が引き継がれた。そこで高等学校世界史教科書を改善するために、吉田のデータをもとに筆者が作成してきた教科書記述一覧表（世界史A12種類、世界史B11種類）を利用し、WGが教科書の間違いや不適切な記述の把握に努めた（青山他 2010）。そしてその成果を生かすため、古代アメリカ学会事務局を通じて、2010年に教科書会社9社に教科書修正案を送付した。さらに2013年度から高等学校が新課程になり、それに伴って部分改訂されたこれらの教科書の記述について、WGと「戦略検討班」によって検証が行われた¹。その結果、大部分の教科書では、先コロンブス期の古代アメリカ文明は植民地化された対象としてではなく、主体的に扱われるようになったことが明らかになった（青山他 2013）。数年にわたり検討してきた教科書修正案には、まだ改善すべき箇所が残されているものの、この修正案が教科書の改訂に及ぼした影響については、一定の評価を与えてよいだろう。筆者による個人レベルの研究と、複数の研究者が多角的な意見を出し合って検討した学会レベルの研究によって、現時点での教科書記述問題はひとまず落ち着いた。

高等学校では平成34（2022）年度から次期学習指導要領が始まり、それまで大きな教科書の改訂はないと考えられる。中央教育審議会（以下中教審）の初等中等教育分科会教育課程部会で整理され、2016年8月に文部科学省より報告された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」によれば、現在必修の「世界史」を廃止し、近現代史分野を中心に日本史と世界史を融合させた「歴史総合」を新たに必修科目に、そして選択科目として「世界史探究」を設けるとある。よって今後は、次期学習指導要領から始まる「歴史総合」や「世界史探究」の教科書に向けて、情報を発信していくべきだろう。

しかし、教科書の記述を正確にするだけで、高等学校世界史の古代アメリカ文明に関する授業は改善されるのだろうか。それを検証するために、教科書記述の修正前後で古代アメリカ文明の授業がどのように変わったのか、2015年4～6月に高校教員にアンケート調査と補足的なインタビューを行った(多々良 2015)。紙面の関係上ここでは詳しい調査結果を省くが、アンケート結果の傾向は次のようになった。

- ・教科書の改訂の有無を知っていたか。
1割以上の教員が知らなかった。
- ・教科書のどの箇所が改訂されたか。
約半数がマヤ文明の年代修正を知っていた。
- ・教科書の教授資料を読んだか。
教授資料の未読者が約半数もいた。
特に10年以上の教員に多かった。
- ・教授資料を活かした点(複数回答可)
マヤ文明の年代以外は、青銅器の分布が1名。
- ・古代アメリカ文明の授業時間数
約半数が1時間程度だが、0～30分も約半数。
- ・回答した授業時間数の理由(複数回答可)
半数弱が他の分野が重要だとし、標準時間(1時間)に基づいたという回答も3割。

以上の傾向に加えてインタビュー結果も考慮すると、①古代アメリカ文明に費やす時間不足、②これまで得てきた知識の蓄積に対する自信、③古代アメリカ文明の量とバランス、④古代文明で一括りにする傾向などがうかがえる。また、現行の学習指導要領より遅れて2013年度から新課程になったため、教科書改訂があったことを知っていても、教科書の体裁が大きく変わらなかったことから、重要な修正があまりなかったと感じていた教員もいた。

したがって、古代アメリカ学会が作成した教科書記述の修正案が、教科書の改訂に一定の役割を果たしたことは間違いがないが、その教科書改訂が歴史教育の改善に十分に貢献したとは言い難い。教科書の内容をいくら改善しても、教員が意識を変えて授業を実践しなければ、歴史教育の改善には繋がらない。そのため、教員の意識が大きく変わる転換点である次期学習指導要領の導入時(平成34年度)に向けて、世界史授業を改善するための新たな一手を打つ必要がある。

教員の意識改革に関し、2014年11月に下村文科相による中教審に対しての「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問が行われて以来、アクティブ・ラーニング(以下AL)という用語が一般化したと思われる。教育現場では、従来の暗記中心の学習や講義形式の授業ではなく、発見学習や問題解決学習が徐々に進められてきている。本来ALは固定した授業形態など存在しないが、ある程度指針となる授業の進め方や生徒に理解させるプロセスが必要となっているのも事実である。

こうした観点から、筆者は複数の高校教員と情報交換しながら、授業を改善するための教科研究に取り組んでいる。授業形式と授業で扱う題材に分けて簡潔に紹介したい。

授業形式については、紙芝居プレゼンテーション法(以下KP法)を他校にも勧めている。これは授業の流れや要点をあらかじめ紙に書いておき、説明しながら黒板に貼っていく方法である(写真1)。利点は説明の時間が短縮できること、板書が不要なこと、説明後に授業の流れがわかること、そして何よりも重要なのは、生徒が考える時間を捻出できることである(多々良 2016a)。またグループ学習は、思考・判断・表現力を高めることを目的として多くの教員が取り入れており、生徒自身が自由に多く発言することや、自分と他者の考えを比較しながら理解を深めることができる方法である。この場合教員側は、生徒自身が気づき、質問し合い、教え合う機会を多く創り出すファシリテーターであることを意識する必要がある。

一方題材として、マヤ文明に関するものでは、建造物の特徴と自然環境(多々良 2016b)や、マヤ文字の特徴と情報内容などを扱ってきた。またアンデス文明に関するものでは、階級発生以前から神殿の建設が見られること(関 2010など)から、従来の文明形成論を再考させてきた。いずれも単なる知識の習得ではなく、従来常識とされてきたことへの懐疑や、歴史の流れを考えさせることに重点を置いている。具体的な授業内容は、別稿に委ねたい。

これら授業改善のための教科研究も、個人的研究から複数の教員によるグループ研究へと発展させていくべきである。古代アメリカ学会では、日本における古代アメリカ文明の歴史・文化教育の普及を目的として2016年に「高校教育検討ワーキンググループ」を立ち上げた。筆者もそのメンバーの一人として、多角的な視点から世界史授業を検討し、より

厚みのある議論への展開に貢献していきたいと考えている。

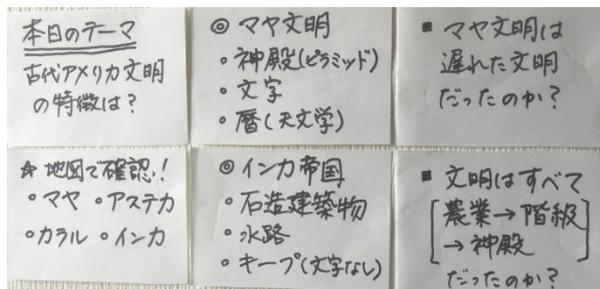


写真1 KP法による授業例

注)

¹ 2013年に高等学校世界史の教科書を出版する会社は6社に減少した(世界史A9種類、世界史B4種類)ため、検証はこの6社の教科書について行った。

参考文献

青山和夫・吉田栄人・坂井正人・井上幸孝・多々良穰

2009 「古代アメリカの学術情報の普及—高等学校世界史教科書問題、マスコミ報道の改善、研究成果の発信と還元—」『古代アメリカ』第12号95-103頁。

青山和夫・多々良穰・坂井正人・井上幸孝・吉田栄人

2010 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」『古代アメリカ』第13号31-40頁。

青山和夫・坂井正人・井上幸孝・井関睦美・長谷川悦夫・嘉幡茂・松本雄一

2013 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の記述はどう変わったのか—新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史教科書の検証—」『古代アメリカ』第16号85-100頁。

関雄二

2010 「序章 古代アンデス文明とは何か」『古代アンデス 神殿から始まる文明』朝日新聞出版。

多々良穰

2001 「第五の古代文明—古代アメリカに栄えたマヤ文明」『歴史と地理』第544号16-26頁。山川出版社。

2002 「マヤ文明考古学の現状 ～高校世界史への活用～」平成14年度宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会例会研究発表資料(研究紀要43号)、2002.7.1、蔵王ハイツ。

2005 「高校生のマヤ・イメージとマヤ文明の授業実践」東北ラテンアメリカ考古学・人類学研究会第24回例会発表資料、2005.5.15、東北大学。

2007 「古代マヤ文明の精神文化 ～生徒の興味をひきだすアプローチ～」第48回全国歴史教育研究協議会発表資料(『全歴研研究報告紀要』48)、2007.7.25、ホテルメトロポリタン仙台。

2009 「高校世界史における中南アメリカ文明の記述について」東北ラテンアメリカ考古学・人類学研究会第42回例会発表資料、2009.3.20、東北大学。

2010 「中南アメリカ文明に関する教科書の記述と授業活用例」平成22年度宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会例会研究発表資料(研究紀要51号)、2010.9.28、仙台工業高校。

2012 「ユネスコ世界遺産と古代マヤ文明 ～生徒の興味をひきだすアプローチ～」第53回全国歴史教育研究協議会発表資料(『全歴研研究報告紀要』53)、2012.8.1、早稲田大学。

2015 「教科書記述の修正による古代アメリカ文明の授業変化」平成27年度宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会例会配布資料、2015.8.3、茂庭荘。

2016a 「考える時間を創り出すKP法による世界史授業」『アクティブラーニングに導くKP法実践』134-39頁、川嶋直・皆川雅樹編、みくに出版。

2016b 「授業実践報告2」古代アメリカ学会第21回研究大会、シンポジウム「古代アメリカに関する高校教育を考える」発表資料。2016.12.4、国立民族学博物館。

吉田栄人

2005 「日本におけるマヤ・イメージの実態—マヤ・イメージに関するアンケート調査から—」『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究』平成14年～16年度科研・基盤研究(B)(1)(課題番号14401009)研究成果報告書。

特集：フィールド調査体験記 II

本特集は、2013年に会報第34号でおこなった同名特集の第二弾です。今回は古代アメリカに関する研究を始めたばかりの学生会員4名にご寄稿いただきました（掲載は氏名50音順）。寄稿者は、初めて現地調査を経験しこれから研究の方向性を定めていこうとしている学生や、既に高校と学部時代を現地で送り、着実に研究を積み重ねつつある学生まで様々です。皆さんには現地調査での体験談を交えながら、自らの問題意識や関心、現地調査の進行状況、今後の展望を綴っていただきました。本特集を通し、次代を担う研究者の卵たちの関心事を広く知っていただく機会になればと思います。

●トラランカレカ考古学プロジェクト調査体験記

荒木昂大（東北大学大学院文学研究科博士課程
前期2年）

トラランカレカ遺跡は、メキシコ合衆国プエブラ州の町、サン・マティアス・トラランカレカの近郊に位置する。現在では農業共有地として利用されているこの地は、メキシコ中央高原における形成期の一大拠点であった。

メソアメリカ考古学に興味を持ちながらも現地での調査経験のまだなかった私が、この遺跡で発掘調査ができたのは、村上達也先生、嘉幡茂先生、福原弘識先生、御三方のご厚意によるものである。2015年末、京都文化博物館で行われた本プロジェクトの講演後の懇親会で、私に調査への参加を認めてくださったのだ。だが、恥ずかしいことに私は海外の調査どころか、スペイン語圏の国に行ったことも海外に長期滞在をしたこともなかった。スペイン語も全く話せない。受け入れていただいた喜びやこれからの期待も大きかったが、それよりもはるかにのしかかる不安を抱えながら調査が始まるまでの日々を過ごした。

6月末、調査が本格的に始まる直前に、私はサン・マティアス・トラランカレカの町に到着した。慣れない私にとってはたどり着くだけで一苦労であった。調査が始まるまでの間、この町を見て回った。トウモロコシ畑が広がり、市場では馴染みのない野菜が並び、野良犬が駆け回る。日本とは全く違うメキシコの風景があった。特に胸を打ったのは、研究所の前の通りから見えるポポカテペトルとイスタシワトルの二つの並び立つ山であった。本でしか知らなかった世界が広がっている、とその時初めて喜びと期待が上回ったのを感じた。

調査が始まると、一気に忙しくなった。私は7月2日から9月10日までの期間参加し、遺跡内の3つの発掘調査に関わった。まず7月から8月上旬までは遺跡内最大のピラミッドであるセロ・グラン

デ・ピラミッドの発掘に携わった。次いで8月中旬から下旬までは、より東にあるトレス・マリーアス建築複合で発掘調査を行った。そして8月下旬から調査の終わりまでは、遺跡中心部のある丘陵部から北東にやや離れた地点での調査に参加した。

調査が始まってすぐに遺跡内最大のピラミッドに関わらせてもらえたのは、大変嬉しいことだった。西正面の階段とその周辺の検出が主な作業内容だったが、建築の一部が露わになるたびに新鮮な感動を味わった。階段が石をどのように重ねて構成されているのか、床は、タルーは。実際に触れて、自分の中のイメージが確固たるものになるのを感じた。



セロ・グランデ・ピラミッドで発掘を行う筆者

©Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla

次のトレス・マリーアス建築複合では、ピットを一つ任せられることになった。村上先生から、どう掘るかも自由に決めていいと言われた。まだ自信のない私は、心もとないスペイン語で作業員さんたちに指示を出し、おそろおそろ進めていった。幸い水平堆積が基本の素直な層序だったので、それほど苦労せず進めることができた。土坑が複数でてくると慌ててしまったり、うまく指示が出せず作業が遅延してしまったりと反省すべき点多かったが、未熟な私に機会を与えていただけたことはただただ感謝である。

最後の北東部での調査では、自らの体力の無さを痛感した。それまでで二ヶ月弱の調査を行ってきたが、これまで日本で経験してきた調査は長くて10日間といったところで、長期的な調査は初めてだった。この頃になると、最初の頃に比べて疲労を感じるようになっていた。今後はもっと長い期間の調査に関わることもあるだろう。体力もまた自分の課題だと痛感した。

トラランカレカ考古学プロジェクトは、メキシコとアメリカの学生、近隣に住む作業員が主力となって発掘作業を行っている。学生で唯一の日本人である私を、皆快く受け入れてくれた。学生たちは、言葉の覚束ない私を毎日食事に誘ってくれ、スペイン語をいろいろ教えてくれた。作業員さんたちはとてもフレンドリーで、経験が浅くうまく指示できない私の言葉でも聞いてくれた。作業員さんの一人には、何度か家に招待され食事をいただいた。メキシコ人の暖かさはとても心地が良かった。

これまで私は、メソアメリカの考古学をやりたい理由として、しっかり言葉で表せるような明確な答えは持ち合わせていなかった。様々な言葉で修飾しても、結局のところ「面白そうだから」止まりだったと思う。セロ・グランデ・ピラミッドでの調査中、テレビ局の取材がやってきた。聞けばアステカテレビというメキシコでは名の知れたテレビ局だと言う。この国の人にとって非常に関心の高い調査に参加している、ということに改めて認識した。メキシコペソ紙幣にはメキシコを代表する遺跡が描かれており、古代文明がそのまま国の象徴的存在として重要視されていることが分かる。植民地時代や多くの政治的混乱を経験してきた中米諸国の人々にとって、自分たちの古代史の評価はどれほど意義のあることなのだろうか。そう考えた時、私がこの国で、メソアメリカという地域で、考古学をやりたい理由を見つけたように感じた。

まだ、一回の発掘調査に参加したに過ぎないが、貴重な経験を元に見識を深め、課題点を見つけることができた。出発前は不安も大きかったが、確実に得るものがあった。

最後に、改めて私をこのプロジェクトに誘ってくださった三名の先生にお礼申し上げます。ありがとうございました。

●世界遺産コパン遺跡での発掘調査体験

小川雅洋（金沢大学大学院人間社会環境科
博士前期課程1年）

調査への参加

私は、2016年8月上旬から9月上旬にかけての約1ヶ月間、コパン遺跡での発掘調査に参加した。本調査は、2003年より実施されている、金沢大学の中村誠一教授をディレクターとしたコパン考古学プロジェクト（PROARCO）の一環であり、9L-22、23グループを修復・保存することを目的としている。プロジェクトは開始6年後の2009年に、ホンジュラスで起こった政変のために中断を余儀なくされたが、今年度より正式に再開されることとなった。なお、私のような若輩者が参加できたのは、中村教授が指揮された前プロジェクト、コパン遺跡保存統合プロジェクト（PICPAC）で、日本人が調査に参加できる土台を築いてくださったからである。改めて先人への尊敬の念を感じる機会ともなった。

筆者は今回、コパンにおける発掘調査の一連の流れを理解し、学ぶことを目的として調査に参加した。様々な石碑や祭壇が配置される大広場や球技場、アクロポリスから成るグループを中心とするコパン遺跡であるが、その北側には「ヌニェス・チンチージャ」と呼ばれるエリアが存在する。ここはエリートの居住地であったと考えられている地区であり、彩色土器やヒスイ製品、土製の笛などの副葬品を伴う王家の子供の墓、そしてコパン13代王が描かれた土器が過去の調査で出土している。そのような地区に立地する9L-23グループの建造物105が今回の発掘現場である。

現場では責任者からの指示を受けつつ、発掘、遺構の実測、写真撮影による遺構・遺物の記録、ふるいによる遺物さらい、取り上げた遺物の洗浄などの作業を行った。短い期間ではあったが、一連の作業に加わり、その流れを追うことができたことは現地での調査方法を理解する上で良い経験となった。また、調査中に出土する黒曜石の量や大きさが印象的であり、当時におけるコパンの重要性を強く実感させられた。

さらに今回の調査では、修復作業にも参加することができた。特に、石壁修復のためのモルタル材充填作業や、建造物の壁を構成する石を外す際に、修復を見据えて行われるナンバリング作業に携わっ

た。適切な修復保存作業は、将来の調査のための遺跡保全という役割だけでなく、修復された外観による観光客への教育的な効果も果たす。私は、このような修復保存を前提とした発掘調査に参加するのが初めてであったため、大変新鮮な体験となった。



調査の一場面（撮影：小川雅洋）

遺跡の価値

遺跡は第一に観光資源として利用されているため、入場料や土産物販売などから経済的利益が生まれることが期待されている。特に、経済状況が芳しくないホンジュラスでは、観光業を貴重な収入源としている現状にある。それに伴って遺跡には、観光資源としての利用価値や経済的利益といったイメージばかりが付きまとっているように思う。しかし反面、遺跡はもっと多様な価値を潜在的に有しているとも思えた。

例えば今回は、文化資源としての遺跡の活用例として、教育とアイデンティティ創出の二つの価値を感じる機会があった。一つ目の教育に関しては、地元の学生たちが学校行事で遺跡や博物館に訪問する姿を見かけることが多々あった。そして二つ目のアイデンティティ創出は、現場で共に働くホンジュラス人を見ていて感じたことである。発掘を共に行った調査員・作業員はホンジュラス人で構成されており、発掘調査を通して雇用創出の機会が生まれている。彼らは発掘調査に携わることで、自国の歴史に関する興味を持ち、それが誇りを持つことにも

つながる。彼らは現場で働き、より近い距離で関わっているため、発掘現場で働く上での職業的な知識はもちろん、考古学やコパンに関する知識を身につける機会も多い。彼らの調査エリアに観光客が訪れた際には、自ら積極的に解説をする場面に度々遭遇した。こういったことから、教育機会の創出やアイデンティティの創出といった価値がコパンでの発掘調査から生まれているように思えた。今後、遺跡から新たな価値を見出すことは、より多様な価値や持続的な恩恵を地域社会にもたらすことにつながるだろう。

今後の展望

今回の発掘調査への参加では、現地での発掘方法を学ぶだけでなく、その調査や遺跡が地域住民にどのように影響するのかについても考えさせられた。今後は、中村教授のプロジェクトの一環である JICA の地域発展事業や凸版印刷株式会社の測量や 3D デジタルアーカイブ事業にも積極的に参加したいと思っている。これらは、社会還元を意識した考古学を学ぶことや、今後研究を進めるにあたり、その成果を地域社会に活かす方法を同時に模索していくことにつながると考えている。

謝辞

金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センターの中村誠一教授からは発掘調査に参加する許可、現地との調整などのサポート・ご指導と本文を書くにあたってのご指導を賜りました。謹んでお礼申し上げます。また、PROARCO メンバーの方々からは発掘現場でのご指導などを賜りました。心より感謝致します。

●本から飛び出した「夢の風景」

金崎由布子（東京大学人文社会系研究科
考古学専門分野修士課程 1 年）

“アンデスの山の向こうに、あの谷間の奥に、あの砂漠の果てに、夢の風景があるのではないか、さあ行ってそれに出会えと、私に誘いの声はささやきつづける。”
（『アンデス「夢の風景」』より）

「きみ、発掘に行きたいか？」

その一言がはじまりでした。

修士課程に進学し、紆余曲折を経て二度目の M1

を迎えた5月。東大総合博物館の鶴見先生の居室にお邪魔して、今後の研究計画の相談にのっていただいた時のことです。先生がご準備をすすめられていた、コトシュ遺跡の再発掘調査に参加しても良いと、そうおっしゃっていただけなのです。

私はこれまで、アンデスでの調査参加の経験はなく、机に向かい、本を開いては、まだ見ぬ遺跡のことを思って胸をときめかせるばかりでした。はじめて書店で手にとって以来、何度となく読み返した『文明の創造力』は、書き込みだらけに手垢だらけ（ついでにコーヒーをこぼしてしみだらけ）です。中でも、「交差した手の神殿」の発見シーンは、何度読んでもその度にわくわくしたものでした。

そういうわけで、返事はもちろん決まっていました。「行きたいです、行かせてください！」

それからの2ヶ月余りは、夢見心地のまま飛ぶように過ぎていきました。博物館に週三で通い、60年代の発掘日誌や写真をデジタル化する仕事をすすめていると、憧れはいよいよ増していき、気づけば出発当日。これから出会えるであろう風景に思いをめぐらせながら、機体へ乗り込んだのでした。

そして、8月1日。ペルーに着いて6日目の朝。いよいよ現場がはじまりました。作業員さんは、全部で五人。遺跡のすぐそばに住んでいる農家の人が主でした。

中に一人、なかなか個性的な方がいました。私は彼を、ひそかに「掘り家のおじさん」と呼んでいたのですが、このおじさん、気分が乗ると、目をみはる勢いで遺構を掘り進めていくのです。しばしば、独断で。以前にも発掘に従事した経験があって、遺構を見る目に自信があるのでしょう、大きな石も迷いなくどかそうとしてしまいます。けれどもたまに、それが遺構の一部であったりして、慌てて駆け寄るような場面も何度かありました。

午後は街に戻り、遺物の整理です。強風の吹くホテルの屋上で、手洗い場を借り、土器洗いにいそしました。

アンデスの土器に手をふれたのも、これがはじめてのことでした。

“…無地の大きな無頸壺や…光沢をもつ強く磨研した土器が目を引き”

“帯状の区画に細かい刻線を斜めに入れ…ポストコクションを施すことが一般的である”

頭の中に、文や図版がよみがえります。けれども、読むと見るでは、見ると触るでは大違い。チャビン期の土器の、指の腹に吸いつくような手触りも、ワイラヒルカ期の驚くような器壁の薄さも、触れてみるまで、決して実感することはできなかつたものでした。水に濡れた土器の表面をなでながら、過去の人々の技術や努力に、はじめて思いが至りました。かつての人たちが、丹精こめて作り上げ、使ったものが、今こうして目の前にある。私の中で、「考古遺物」が、「モノ」になった瞬間でした。

私は、卒業論文で、「アンデス形成期における儀礼行為の実践」をテーマに、研究の現状と課題をまとめようと試みました。読み返せば、恥ずかしいことしきりですが、書き上げてから2年が経ち、調査にも参加させていただいて、自分がやりたいことは何だろう、とあらためて問いなおしてみました。

昔から、社会の授業で興味を引かれるのは、歴史の本筋ではなく文化史の方でした。平安貴族の食事や衣装、弥生時代から江戸時代までの農具の歴史。そこにかつてあったであろう、生き生きとした暮らしの姿を想像するのが好きだったので。儀礼をテーマに選んだのも、現代とどれほど違う行為が行われていたんだろうと、そんな単純な興味からでした。

その一方で、考古学が射程とするのは、過去の社会やその変化だ、という思いが強くなりました。長期にわたる社会の変化を捉えることができるのが、長い時間幅を反映する、考古資料独自の特性であると学んできたからです。けれどもそもそも、社会とは何なのでしょう。もちろん、この問いはとても難しく深遠で、今だって私の中に答えがあるわけではないのですが、卒論執筆当時、私はその中身について、考えてみることもさえしなかつたような気がします。そして、どうしても、社会とそこに生きていた人びとの暮らしとが結びつかず、知りたいことは行為にあるはずなのに、自分の中で実体を持たない、空虚な概念としてのそれに振り回され、やがて自分が何を知らなかったのかさえ、分からなくなっていました。

けれども今回、肌で感じたことがあります。それは、言葉にすれば当たり前のことなのですが、人が集まって、社会がつくられ、変化するということです。言い換えれば、社会と呼ばれるものは、人々の織りなすさまざまな営みの集合だ、ということです。例えば「神殿をつくる」といったときの、実際に

人が石を動かし、土を運び、一つの建築を完成させていくイメージ。そういった、言葉の持つ“厚さ”のようなものが、私の中からごっそり抜け落ちていたような気がするのです。そして今回、実際に土に触れ、遺構を目にし、作業員さんと一緒に地面を掘り石を積み。そうした経験を経てはじめて「神殿をつくり、埋め、新たな神殿を作る」ということがどのような労働であるのか、社会すら変えていくほどの大事業であるのか、そういったことを実感と結びつけて考え始めるようになりました。

遺物についても同じです。土器の変化とは、とりもなおさず、土器を作った人々の、その作り方の変化です。一片の土器片の先にある、製作者の指先。同じ指先でつついて、撫でて、そうして初めて、土器の変化とはどういうことなのか、その背後にある人の動作、行動、そしてその集合としての社会動態というものを、考えられるようになるのだと思いました。

紙の上の、遠い異国の土地だったワヌコは、色あざやかな記憶のある、血のかよった場所になりました。言葉のおぼつかない私に、構わず毎日話しかけてくれたホテルの女の子。街角にただようパンの焼ける香ばしいにおい。四方を囲む山々のながめ（道を覚えるのが苦手な私は、道に迷うたび、山からの距離で進行方向を決めたものでした）。そして、雨季が近づき、霧雨にけぶるイゲーラス川。

かつてここにあった社会は、きっと、今のそれとは全くちがっていたのでしょう。けれどもそれは、脳裏によみがえるこうした記憶と、同じように“厚さ”をもつ、人々の暮らしであるはずです。どんな日常や非日常が、そこで営まれていたのでしょうか。それはきっと、私の思いもよらない、けれども確かな実体のある、生き生きとした生のあり方なのでしょう。

いつかたどり着きたいその姿こそ、私の「夢の風景」なのかもしれません。

参考文献

大貫良夫

2000 『アンデス「夢の風景」』中央公論新社。

加藤泰健・関雄二 編

1998 『文明の創造力』角川書店。

●コスタリカ共和国におけるヒスイ製品の資料調査

久保山和佳（早稲田大学大学院文学研究科
考古学コース修士課程1年）

はじめに

筆者は、高校と学部の計2年間をコスタリカ共和国で過ごした。コスタリカ大学在籍中に、同大学が行うグアヤボ遺跡国立公園における発掘プロジェクトへ参加したことをきっかけに、考古学を学び始めた。考古学の授業ではじめてヒスイ博物館を訪れた際、収蔵されているヒスイ製品の数とモチーフの多様性に圧倒されたのを覚えている。

後300-700年に最盛期を迎えたヒスイ製品は、コスタリカにおける最初の威信財であり、副葬品として利用された（Guerrero 1993, Hoopes 2005）。これはこの地域で階層化社会が成立していたことを示している。ヒスイ製品はメキシコからコスタリカ北部まで分布するが、ホンジュラス南部やニカラグアでは一般的でない（Salgado and Guerrero 2005, Soto 1993）。この地域で、重要な威信財であるヒスイ製品を研究することは、社会階層化とそれに伴う地域間交流の様相について考察する一助となるだろうと考えている。

ヒスイ博物館での資料調査

筆者は2016年8月から9月にかけて、コスタリカヒスイ博物館の協力の下、ヒスイ製ペンダントの実見と形態分類を行った。ヒスイ製と言っても、コスタリカの考古学におけるヒスイの定義はかなり大まかである。これらはjade socialと呼ばれ、鉱物学的に翡翠と異なる蛇紋岩、メノウ、玉髄、オパール、石英などの鉱物を指す。同博物館の Sergio Garcia 氏によれば、2000点近くのヒスイ製品を収蔵しているが、その多くが盗掘などによるコレクション品であり、出土コンテクストを持つものが限られるという。

また、多くの先行研究において、ヒスイ製ペンダントの形態学的分析がされている。しかし、今までにこれらのペンダントの体系的な分類がされていない。そこで筆者は、ペンダントの形態分類を行うことにした。コスタリカのヒスイ製品の大半を占めるモチーフにディオス・アチャ型がある。これらのペンダントは、その上部に人間や動物が彫刻・浮刻され、下部は研磨され装飾のない斧のような形状を残している。コスタリカの出土品にはこれと類似し

た形態の金製品、骨製品、貝製品が見られ、どれも下部に刃の形状が残される。ゆえに、この形態の斧状の形は重要な象徴的意味を持っていたのではないかと考えている。

今回の調査での収穫

今回筆者が行った形態分類から、ディオス・アチャ型ペンダントには多様なサイズ、断面形状、モチーフが見られ、これは用途や利用場面の違いを反映するという所見が得られた。

今回の調査では、ヒスイ博物館をはじめ、国立博物館や中央銀行博物館、コスタリカ大学の考古学者と交流する機会に恵まれ、様々なアドバイスや援助を受けることができた。研究を始めたばかりの筆者にとって、とても有意義なものとなった。点数と多様性に富むヒスイ製品は、コスタリカの一般国民の間でも関心が高く、外国人である筆者の研究がどのように還元できるかを改めて考えさせられた。



ヒスイ博物館収蔵のディオス・アチャ型ペンダント

おわりに

修士論文執筆のため、今回行った形態分類をベースに引き続き調査を続けていきたい。今後は、ヒスイ博物館にあわせて国立博物館での発掘資料の集成も行い、ペンダントの形態に地域差、年代差があるのかを見ていきたいと考えている。

参考文献

Guerrero Miranda, Juan V.

1993 “The Context of Jade in Costa Rica”, *Precolumbian Jade: New Geological and Cultural Interpretations*, F. W. Lange (ed.), pp.191-202, University of Utah Press, Salt Lake City.

Hoopes, John. W.

2005 “The Emergence of Social Complexity in the Chibchan World of Southern Central America and Northern Colombia, A.D.300-600”, *Journal of Archaeological Research*, Vol.13, No.1, pp.1-47.

Salgado G, Silvia and Juan V. Guerrero Miranda

2005 “La distribución de la jadeíta en Centroamérica y su significado social”, *Cuadernos de Antropología*, No.15, pp.53-64.

Soto, Zulay

1993 “Jades in the Jade Museum, Instituto Nacional de Seguros, San Jose, Costa Rica”, *Precolumbian Jade: New Geological and Cultural Interpretations*, F. W. Lange (ed.), pp.68-72, University of Utah Press, Salt Lake City.

本学会協力事業の報告

● (緊急企画) 『2016 エクアドル地震』による文化財被害状況 報告会

大平秀一 (東海大学)

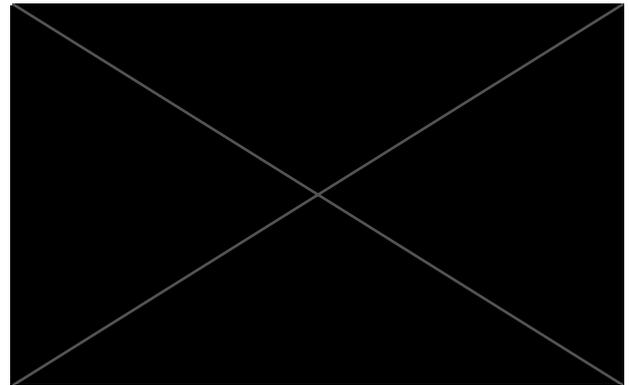
2016年12月16日(金)、東京国立博物館平成館小講堂において、『2016 エクアドル地震』による文化財被害状況 報告会が開催された(主催:文化庁、文化遺産国際協力コンソーシアム、共催:国際交流基金、協力:古代アメリカ学会)。この報告会の目的は、『2016 エクアドル地震』による文化財被害の実状把握のための調査(主催:国際交流基金、共催:在エクアドル日本国大使館、協力:文化遺産国際協力コンソーシアム、調査者:大平、期間:2016年9月2日~15日)によって得られた情報を共有し、日本による支援の可能性を探ることにおかれた。報告会はシンポジウム形式で実施され、関雄二氏(国立民族学博物館教授)が司会、保存科学を専門とする日高真吾氏(国立民族学博物館准教授)がコメンテーター、大平が報告者を務めた。ご来場いただいた方の総数は25名であった。

冒頭に、文化遺産国際協力コンソーシアム会長の石澤良昭氏(上智大学特別招聘教授)よりご挨拶を賜り、同副会長の関雄二氏よりコンソーシアムの活動内容および本報告会の趣旨説明がなされた。その後、大平により博物館を中心とした文化財被害の実状が取り上げられ、被災状況・原因(展示物の転倒・落下・衝突/展示ケースの転倒/不十分な固定)、被

害が土製品に集中していること、被災点数(調査対象とした博物館のみでも推計で500点前後/全体で数千点におよぶ可能性)、被災への対応がスムーズに進んでいないこと、などが報告された。

引き続き日高氏により、(1)被災、(2)救出・一時保管、(3)応急措置、(4)整理・記録、(5)保存修復、(6)恒久保管、(7)研究・活用、(8)防災という8つのステージからなる日本の「文化財レスキュー事業」の活動内容を基にコメントが寄せられた。

最後に関氏、日高氏、大平により、日本とエクアドル・アンデス地域の文化財被害の実状・対処、文化財行政、文化財の社会的位置づけなどに関する比較・議論がなされ、緊急の支援に加えて、専門家の招聘等も含め、中期的な見通しにたった支援の重要性が指摘された。



(写真提供:文化遺産国際協力コンソーシアム事務局)

第5回西日本部会研究懇談会の報告

第5回西日本部会研究懇談会

『古代アメリカの祭祀・儀礼研究』

第5回西日本部会研究懇談会は、平成28年7月9日（土）、京都府京都文化博物館別館2階講義室にて開催された。参加者は13名であった。

今回の研究懇談会では、「古代アメリカの祭祀・儀礼研究」と題して、博士論文執筆を目前に控えるお二人の研究者にメソアメリカとアンデス、それぞれを題材にご発表いただいた。

発表の一人目は千葉裕太会員（愛知県立大学国際文化研究科博士後期課程）で、「黒曜石を用いた世界観の物質化—テオティワカンの埋葬墓における型式分類と空間分析より—」であった。これまでの黒曜石研究が黒曜石の利器としての用途や形状、産地同定が主なテーマだったとする千葉会員は、独自の宇宙観を表現した計画都市であるテオティワカンにおいて、埋葬墓にもその世界観が表現されていると考え、墓に副葬された黒曜石からそれを読み解こうという発表であった。

二人目は、荒田恵会員（国立民族学博物館外来研究員・関西大学非常勤講師）で「パコパンパ遺跡における威信財の儀礼的製作と廃棄に関する一考察」と題し、同遺跡から出土した石器、骨角貝器などの資料を用いて、威信財とされる品々の製作から廃棄までの一連の行為が儀礼的であったかどうかを分析された。荒田会員の発表は、これまでの先行研究で提示された、威信財が製作、利用、廃棄の諸工程全体を通じて儀礼的に扱われたとする見通しを、本研究で検証しようというものであった。

コメンテーターとして、千葉会員の発表には青山和夫会員（茨城大学教授）、荒田会員の発表には佐藤吉文会員をお迎えした（南山大学人類学研究所非常勤研究員・神戸市外国語大学非常勤講師）。発表者のお二人とも、宇宙観や祭祀・儀礼と言った抽象度の高いテーマを扱っていたため、コメンテーターからは、発表で用いた諸概念の理論的説明、そして考古学的事象から析出されたデータの解釈の仕方について、具体的且つ実践的なコメントがあった。とりわけ千葉会員が青山会員からの鋭いコメントに次々と返答するという受け応えの様は、その後、参加者を含めた質疑応答での非常に活発なディスカッションを促したように思う。また荒田会員の発表

については、6月に実施された東日本部会にて中川会員が類似のテーマに関して異なる視点と材料から発表を行っており、その発表内容や発表後のディスカッションにて提起された内容が、今回の質疑応答でも振り返られ、議論の整理につながっていたようだ。

今回の西日本部会は、日程調整に苦勞した。本会は当初企画段階では、四年に一度しか開かれない世界考古学会議（World Archaeological Congress。開催期間：8月28日～9月2日）が、京都にやってくるこの機会を活かし、この日程に近づけて開催できればと考えた。ラテンアメリカを含む、文字どおり世界中から考古学関係者がやってくることに加え、日本人の参加が大変多いことがわかっており、これに何らかの形で関連づければ、古代アメリカ学会の活動をさらに普及し、また研究懇談会の参加者増加につながるのではないかと考えたからだ。しかし、同期間は研究者にとって長期間フィールドワークが可能な貴重な時期であり、また世界考古学会議自体の運営の都合から、やはり8月開催は諦め、ほぼ例年通りの7月開催となった。発表者やコメンテーターの皆様には何かとご迷惑をおかけした。

研究懇談会は、この取組が始まった当初から、開催時期に何か決まりがあって開始されたものではなく、会員ができるだけ参加できる時期を見極め、発表者と調整しながら日程を決定してきた。五年目を迎え、6月ないし7月開催が最も適した時期として定まってきた感がある。今後も様々な可能性を探る必要はあると思うものの、会員の皆様には、この時期は研究懇談会に参加すると予定を立てていただき、より多くの参加者があることを期待したい。

（西日本部会幹事：村野正景）



会員の受賞

本学会の関雄二会員が、外務大臣表彰を受賞されました。ペルーにおいて遺跡の発掘・分析に取り組み、特に現地の大学との学術交流のもと実施したパコパンパ遺跡発掘が、日本の学術水準に対する高い評価と信頼に繋がった他、発掘調査に日・ペルー両国の若手研究者や学生を多数参画させ、後進の育成

に尽力したのみならず、両国友好協力関係を促進し、双方の学術交流に重要な役割を果たしたこと、またアンデス考古学に関する多数の著作のほか、広く一般に向けたシンポジウムを積極的に開催し、日本における同地域の理解を促進したことが認められての受賞となりました。誠にありがとうございます。

第 21 回 研究大会報告



本学会第 21 回研究大会（主催：古代アメリカ学会、協力：国立民族学博物館）は 2016 年 12 月 3 日（土）、4 日（日）に国立民族学博物館で開催され、学会員 52 名、一般参加者 17 名、計 69 名の参加があった。調査速報が 18 本、研究発表が 2 本発表され、「古代アメリカに関する高校教育を考える」と題した特別シンポジウムが行われた。発表の詳細は以下のとおりである。

調査速報（12 月 3 日 12:50-16:10）

12:50-13:10

「ペルー南海岸ベンティーヤ遺跡の発掘調査」

山本睦（山形大学）
坂井正人（山形大学）
ホルヘ・オラーノ（山形大学）
松本雄一（山形大学）

ベンティーヤ遺跡は、ペルー南海岸のインヘニオ谷南岸に位置し、同谷で最大規模を誇るナスカ期（紀元前 100-紀元後 600 年）の遺跡である。

先行研究によればこの地域には、ナスカ期において多くの地上絵が集中的に分布するナスカ台地をばさんで、南のナスカ谷のカワチと北のインヘニオ

谷のベンティーヤという二大センターがあったとされる。そして、カワチに関しては、長期にわたる発掘調査と土器分析の成果にもとづいて、パラカス期からナスカ期（紀元前 500-紀元後 500 年）における中心的な祭祀・巡礼センターであったことが指摘されている。その一方、ベンティーヤ遺跡では、発掘調査が実施されたことはなく、その詳細は不明であった。

インヘニオ谷では現在、80 年代に実施された遺跡分布調査データを精査し、セトルメント・パターンおよびその変遷を把握することを目的として、山形大学のチームによって集中的な考古学調査が実施されている。その一環として、2015～2106 年には、ベンティーヤ遺跡で発掘調査がおこなわれた。

発掘調査の主目的は、考古学的基礎データの獲得、とくに基礎編年を確立するために、建設プロセスの把握とそれに対応した考古遺物の時代的变化の把握であった。そして、遺跡内の各建造物の機能やその関係性を同定することも目的の一つとされた。

発掘調査の結果、ベンティーヤ遺跡では大きく 3 つの建設フェイズがあることが確認された。現在、出土遺物は分析中であり、放射性炭素による年代測定も実施していないため、詳細な年代については不明である。しかしながら、周辺地域をふくめた先行研究との比較によれば、ナスカ 1～5 期の土器に対応した建設活動があったことは明白である。

本発表では、ベンティーヤ遺跡におけるここまでの成果を、とくに建設プロセスと出土土器との関連に重点をおいて総括した。また、インヘニオ谷のセトルメント・パターン調査の成果も考慮し、カワチ遺跡との比較検討をふまえながら、同谷のナスカ期における社会変化についての仮説的見解を述べた。

13:10-13:30

「通過儀礼から見た祭祀建築の一生：ワリ国家のD字形建築を事例として」

土井正樹（山形大学）

本発表では、近年ワリ国家の祭祀建築として注目されるようになったD字形建築を対象とし、その建設から放棄までの節目において実施された儀礼の痕跡に注目することにより、D字形建築が当時の人々にどのように扱われ認識されていたのかを明らかにすることを試みた。

ワリ国家は、現在のペルーを中心とする中央アンデス地域の編年において、中期ホライズン（紀元後600-1,000年）と呼ばれる時期にペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷を中心に栄え、中央アンデス地域の山岳部および海岸部にひろく政治的影響力を及ぼしていたと考えられている。D字形建築は、最近になりワリ国家の祭祀施設として認識されるようになったものであり、円形建築の壁の一部が直線になった、いかえれば平面プランがアルファベットのDに似た形態をしているという特徴を有している。ワリ国家に関する考古学的調査の進展により、近年ワリ国家に関連する中央アンデス地域各地のD字形建築に関する発掘資料が増加しつつある。とくに最近では、ワリ国家の首都であるワリ遺跡からD字形建築に関する興味深い発掘資料が報告されている。しかしながら、D字形建築に関する研究としては、個別遺跡の発掘資料の提示にとどまるものが多く、D字形建築全体を対象として、その機能や当時の人々によってどのようにそれらが認識されていたのかを明らかにしようとする研究は少ない。

本発表では、発掘調査が行われている複数の遺跡のD字形建築を対象とし、通過儀礼という視点から分析した。通過儀礼とは、誕生、成人、結婚、死といった人生の節目に実施され、本来連続的である人生に区切りを付け、ある段階から別の段階への移行を特徴付けるものである。これをモノに適用した場合、大きく製作（誕生）、使用（生活期）、廃棄（死）の段階としてとらえることができる。本発表では、D字形建築が当時の人々によってどのように認識されていたのか明らかにするために現在行っている、D字形建築の通過儀礼に関する分析の経過について報告した。

13:30-13:50

「ワリ期の人物表現について―ペルー北部高地カハマルカ地方の事例―」

渡部森哉（南山大学）

インカ帝国はインカ族が80を超す他の民族集団を支配した多民族国家であったとされる。そして各民族集団は頭飾りや服装が決まっており、他の地域に移動してもそれらを変更することが禁止されていたという。しかしこうした多民族状況を考古学データから復元することは難しい。服や頭飾りが発掘調査で見つかることはまれである。また行政センターなどから出土する土器の多くはインカ様式であり、多民族状況から予想されるような多様な土器が見つかることはない。またインカ文化では人物表現が極端に少ないため、図像表現の服や頭飾りを分析するという方法も有効ではない。

ワリ期（後700-1000年）は中央アンデス中央高地南部のワリ遺跡を首都としたワリ帝国が台頭した時期とされる。後のインカ帝国の祖型と見なされるが、ワリ国家もインカ帝国と同様に多民族国家であるとすれば、どのようにそれを議論できるであろうか。インカ期にはインカ様式の土器が各地の遺跡にほぼ例外なく見つかるとともに、特に行政センターでは出土土器の大部分を占めることが多い。しかしワリ様式土器は、ワリ帝国の勢力範囲内で見つかるものの、非常に少数である。ワリ関連遺跡では、出土土器の大部分を占めるのは在地の土器であり、ワリ様式や他の地域の土器が共伴するというのが一般的なパターンである。また前時代と比較して、ワリ期には1つの遺跡で見つかる土器の種類が増加する。土器に着目するとワリ期は統一性が強まるのではなく、むしろ多様性が増す時期であると言える。民族を示す物質的指標があれば考古学的に議論できるが、土器様式そのものが民族集団と1対1で対応するかどうかは慎重に検討する必要がある。

本発表では、土器様式の多様性のみならず、ワリ文化における人物表現に注目し、それがワリ帝国の多民族状況を示すのか、あるいは役割の違いなどを示すのかどうかを検討した。ペルー北部高地カハマルカ地方を事例とし、ワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオ遺跡出土遺物を分析した。

14:00-14:20

「ホンジュラス、コパンのマヤ遺跡における発掘調査—2016年度の概要紹介—」

中村誠一（金沢大学）

マヤ文明を代表する世界遺産の一つであるホンジュラスのコパン遺跡では、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所により、日本政府から供与されたノンプロ無償資金協力のホンジュラス側見返り資金を原資として、2009年の政変で中断した大規模な発掘調査が本年度から再開された。場所は、コパン遺跡大広場の北に位置する通称「ヌニェス・チンチージャ」グループと呼ばれる二つのエリート居住区域である。発表者は、ホンジュラス政府より前フェーズから引き続きプロジェクトの総合ディレクターを委託され、コパン遺跡公園を地域の文化資源として保存しつつ活用していく先端事例であるこのプロジェクトを指揮している。文化資源学的観点からのプロジェクト活動の大きな特徴の一つは、発掘・修復現場を毎日、一般に公開し、その作業を常時近くから内外の観光客に見てもらい双方向的に交流するというこれまでに前例のない公開法を取っている点にある。

一方、考古学的観点からの今年度のプロジェクト活動では、グループ全体の最大建造物である建造物9L-105を主要なターゲットとして発掘調査が行われた。この建造物は、その全体規模や主部屋の広さ、部屋内のベンチの規模、使われている切石ブロックの質などから、周辺の建造物とは一線を画し、このグループの長と思われる権力者の家であると考えられた。発掘調査を進めた結果、2016年の秋までに、主部屋の前庭部の地表下約2メートルの地点から埋葬5体が見つかり、そのうち3体にはかなり豪華な副葬品が共伴していた。しかしながら、発表者は、これらの埋葬は主部屋のベンチ下に埋まっている可能性のある、より高位の中心的人物に捧げられたいけにえ埋葬あるいはあの世への共伴埋葬ではないかと考えている。

この発表では、コパン遺跡における最前線の調査成果を報告し、コパン政治文化史にこのグループやこれら特異な埋葬が持つ意味について考察した。

14:20-14:40

「コパン周縁に見られるモザイク石彫」

平尾雅代（金沢大学大学院博士後期課程）

ホンジュラス西端部のコパンでは、王朝創始期の建造物装飾は漆喰であったのに対し、7世紀～9世紀にはモザイク状の石造彫刻（以下、モザイク石彫と呼ぶ。）を嵌め込んだ装飾が見られる。コパン周縁の地方センターに見られるモザイク石彫に関しては、未だ十分に研究されておらず、地理的にどの様な広がりを見せ、どの様なものが表現されていたのかは未だよく分かっていない。

そこで、地方センターのモザイク石彫データを少しでも多く収集し分析するために、以下3つの活動を現地で行っている。

- 1、既に収集されているモザイク石彫に関する資料（写真、野帳、手記、定期報告書、図面など）の収集
- 2、1の資料を用いて、寄贈品などの出所不明のモザイク石彫の出所や寄贈経緯の同定
- 3、遺跡から持ち出され、近現代建築物に再利用されたモザイク石彫の確認と写真データ収集

現在、確認されている地方センターのモザイク石彫は、発掘調査、試掘、踏査によって採集されたものもあるが、1983年から1993年に実施されたラ・エントラーダ考古学プロジェクト第一、第二フェーズ期間に、地主などから寄贈されたものが多く、石彫研究をする上で重要な位置を占めている。モザイク石彫自体はラ・エントラーダ市の収蔵庫に263点保管されているが、それらに関する資料（写真、野帳、手記、定期報告書、図面など）の多くは残念ながら散逸しており、寄贈経緯や出所場所などが分からなくなってしまう。そのため、学術資料として使用可能なレベルにする作業を行っている。

その結果、263点中186点については出所（寄贈経緯もしくは、採取遺跡）を同定する事ができた。

また前述のプロジェクトにおいて、遺跡から持ち出され、教会や個人宅に再利用されたモザイク石彫の存在も確認されている。そこで、実際に現地へ行き、合計約160点のモザイク石彫を視認することができた。可能な限り、写真撮影や寸法計測などのデータ収集を行った。

14:40-15:00

「ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市における学校教育と博物館に関する調査速報」

五木田まきは（金沢大学大学院博士後期課程）

本発表では、ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市において 2015 年と 2016 年に行った学校の博物館利用に関する実態調査の結果を提示し、当該地における学校教育と博物館の連携へむけた現状と課題を明らかにし、今後の展望を考察した。

コパン・ルイナス市はホンジュラス共和国西部コパン県にあり、ユネスコ世界文化遺産の「コパンのマヤ遺跡」を有する市である。コパンは国内有数の観光地であり、遺跡公園内に加え、町の中心部には複数の博物館が設置されている。長年にわたり国内外の研究者により調査が行われてきた遺跡そのものとは対照的に、町中に建てられたこれらの博物館の機能や地域社会との関係については、これまで研究の焦点が当てられてこなかった。

では、地域住民たちは博物館をどのように利用し、博物館に何を期待しているのか。そして博物館は地域社会にどのように関わり貢献することができるのか。こうした問題意識のもと、2015 年 9 月にコパン・ルイナス市において、博物館利用と博物館に求める機能について、博物館職員、一般市民、学校教員を対象とした聞き取り調査を行った。調査の結果、在住年数に関わらず一般市民は博物館利用の経験を持つが、今後期待する機能として主婦層を筆頭に博物館と学校教育の連携が挙げられた。学校教員もその意欲はあるものの、博物館側の体制や人材不足により実現に繋がらないという実態が明らかになった。

さらに、2016 年 7 月から 8 月にかけては、2015 年 12 月に新たに開館したコパン・デジタル・ミュージアムを拠点とし、学校教育の枠組みにおける博物館利用の現状と課題を明らかにすることを目的とした現地調査を実施した。調査方法は、博物館における参与観察、及び博物館職員と学校教員を対象とした聞き取り調査である。

以上のように本発表では、2015 年 9 月、及び 2016 年 7 月から 8 月にかけて行った現地調査を概報し、教育という側面から地域社会と博物館の関係構築への現状と課題、そして今後の道筋を考察した。

15:10-15:30

「パコパンパ遺跡カハマルカ期ミニチュア土器の分析」

中川渚（総合研究大学院大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

ペルー北部山地に位置するパコパンパ遺跡は形成期の神殿遺跡であるが、カハマルカ期の儀礼的再利用の痕跡や、同時期に形成期の建築物を封印した痕跡も確認されている。本発表では、パコパンパ遺跡第 3 基壇の方形半地下式広場より出土した、ミニチュア土器の分析結果を提示し、カハマルカ期の儀礼的再利用について検討した。

ミニチュア土器は、2006 年～2008 年および 2013 年～2015 年に実施された同広場の発掘調査によって、半完形および完形、破片の状態で出土しており、半完形以上のものでも約 500 点を数える。方形半地下式広場は形成期に建設され、主にこの時期に利用されたものであるが、これらのミニチュア土器は共伴する精製土器からカハマルカ前期（紀元後 250-400 年）のものと推定され、カハマルカ期に広場内で行われた儀礼の痕跡と考えられる。

ミニチュア土器の器形は、そのほとんどが短頸壺であるが、甕や鉢の形状を持つものもある。約 500 点のミニチュア土器の口径、胴部径、器高など各部位を計測し、詳細な器形分類を行った。さらに、これらの器形、色、製作方法などの属性について記録し、広場内における出土傾向を分析した。その結果、多様なミニチュア土器が、広場中央に位置するカハマルカ期の建築物南西付近に集中して出土しており、この建築物が儀礼において中心的な役割を果たしていたことが明らかになった。一方広場全体で見た場合は、出土傾向に差があり、各集団が広場中央に位置する建築物付近にミニチュア土器を供えた後、各々広場内に散らばって儀礼に参加したと想定される。

このように大量のミニチュア土器を供える類例として、カハマルカ盆地や北海岸で墓の副葬品として出土したものが挙げられる。しかしパコパンパ遺跡の場合はモニュメンタルな墓を伴わないことから、埋葬の対象が人物ではなく、広場自体であったと考えられる。

15:30-15:50

「ペルー、パコパンパ遺跡から出土した人骨の生物考古学的研究—2016年度調査報告—」

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）
関雄二（国立民族学博物館）
鶴澤和宏（東亜大学）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ
（ペルー国立サン・マルコス大学）
ダニエル・モラーレス
（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ遺跡は、ペルー北高地の形成期の祭祀遺跡である。2015年の北側基壇の発掘では、蛇ジャガー・神官の墓から2体の被葬者が発見された。北側被葬者の腹部付近にはジャガーの顔とヘビの胴体をもつ黒色象形鏡形壺1点が発見され、その深層の南側被葬者の頸部付近からは金製の飾り玉からなる首飾りが発見された。また、南側被葬者の頭頸部付近からは、赤色顔料が検出された。人骨の人類学的な鑑定の結果、北側被葬者は右距骨が南側被葬者の足の位置で発見されたものの、それ以外の部位は解剖学的位置を保って出土した。死亡年齢は35～54歳であり、性別は女性であった。また、推定身長は140.5cmであり、パコパンパ遺跡の女性の平均身長よりも約10cm低身長であった。人工頭蓋変形の有無は不明であった。一方、南側被葬者は解剖学的位置を保って出土した全身骨であった。大腿骨の遠位端、小転子、大転子、脛骨近位端、腓骨近位端は未癒合であり、大腿骨近位端と腓骨遠位端は癒合中であった。第3大臼歯は歯根が1/4形成されており、歯の咬耗はまったくなかった。恥骨の形態的特徴や歯の咬耗により死亡年齢は15歳前後と推定できた。性別に関しては、15歳前後という年齢ゆえに性的二形が不明瞭であるものの、恥骨下部の腹側弧がなく恥骨体の幅が狭いという点は男性的である。頭蓋冠片が残るが保存状態が不良で、項稜は未発達でやや平坦であるが、人工頭蓋変形の有無は不明であった。上顎では、左右側切歯と右犬歯が先天喪失し、右中切歯は歯槽に上下逆さに埋没していた。下顎では、左側切歯が先天喪失し、オトガイ結節の発達が見られた。これまでパコパンパ遺跡で発見された金属製品を伴う貴人墓は女性の埋葬を中心としていたが、今回発見された人骨は若齢の男性の可能性があり、パコパンパ遺跡の貴人墓の埋葬者には成人女性だけでなく多様な人々がいた

ことが示唆された。

15:50-16:10

「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテクストから出土した動物骨資料：饗宴との関係を中心として」

鶴澤和宏（東亜大学）
ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ
（ペルー国立サン・マルコス大学）
関雄二（国立民族学博物館）

パコパンパ神殿中央基壇の中心部に等間隔で配置された複数の土坑から、銅製品、骨角器、石器などとともに、動物骨が検出されている。本資料については2014年に分析を行い、同年の本学会において、動物種、部位の構成等について概要を報告している。その後、調査の進展にともなって、土坑への埋納のほかにも儀礼行為と関係する動物利用の存在が明らかになってきた。動物の利用を伴う複数の儀礼行為がどのような目的を持って行われたのか、またそれぞれの儀礼行為のあいだには何らかの相互関係が見出されるのか、具体的に検討できる条件が整ってきたといえる。

本発表では、土坑出土の動物骨資料と他の儀礼的コンテクストから検出された資料との比較結果を報告し、複数の儀礼行為が相互に関係して行われていた可能性を指摘した。土坑資料と比較したのは、北基壇に設けられたパティオで検出された饗宴の残滓である。同定標本数2,411点からなる資料には、異なる生態環境に生息する7種の動物が含まれ、骨には解体痕のほか犬やネズミによる食痕が観察されている。こうした骨資料の特徴から、生息地の異なる動物が饗宴にあわせて神殿に搬入されるようあらかじめ計画されていたこと、饗宴後は食べ残した骨が放置されていたことが明らかとなっている。今回、土坑資料を再分析した結果、動物骨には、(1)少なくとも6種の哺乳類が含まれ、(2)解体痕および動物による食痕をとまなうこと、(3)出土部位にはばらつきがあり身体のごく一部が埋納されていること、(4)異なる保存状態を示す破片が接合する事例があることなどが確認された。土坑資料と饗宴資料の保存状態には共通点が多く、土坑資料が饗宴の残滓を部分的に抽出したものと想定すると、部位の偏りが大きいこと、保存状態の異なる破片が含まれることなども説明できる。土坑への埋

納儀礼に先立ち、饗宴が行われていた可能性が示唆される。

研究発表（12月3日 16:20-16:50）

16:20-16:50

「ペルー北部高地パコパンパ遺跡における形成期後期のC₄資源利用」

瀧上舞（山形大学）

関雄二（国立民族学博物館）

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）

鶴澤和宏（東亜大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

米田穰（東京大学）

形成期の中央アンデス地帯において、トウモロコシがいつ頃、どのように受容されていったのかというテーマは多くの研究者が注目するところである。トウモロコシ遺存体や花粉分析、デンプン粒分析から、その栽培は形成期初期には始まっていたと考えられている。しかし、同位体分析による摂取量の評価では、C₄資源の利用量の増加は形成期より後の時代に生じたという報告が広く受け入れられている。一部の遺跡では、形成期後期にC₄資源のやや高い摂取量が報告されているが、同一遺跡での食性の時代変化は確認されていない。

さらに、集団内での食料摂取の個人差も注目される。中央アンデス地帯では、トウモロコシ栽培が権力者集団の台頭に関係しているという指摘もある。また、祭祀におけるチチャの利用も形成期に始まっている可能性が指摘されており、特に権力の萌芽がみられる形成期中期から後期にかけての神殿遺跡で、特別に埋葬された人々とそうでない人々の間で食性に違いが生じていたことも想定される。しかしながら、形成期の遺跡内での食性の個人差についてはほとんど検証されていない。

そこで本研究では、ペルー北部高地のパコパンパ遺跡から出土した動物骨と古人骨を用いて、食性の時代差と集団内での食性差を検証した。炭素・窒素同位体比を用いた食性推定の方法は広く知られているが、部位による同位体比の違いを利用した食性推定の報告はまだそれほど多くない。骨コラーゲンは特にタンパク質源の同位体比に強く影響されるが、歯のエナメル質中のヒドロキシアパタイトは摂取した全食物の平均的な同位体比を反映する。そ

のため、骨コラーゲンとヒドロキシアパタイトの同位体比を比較することで、摂取されたC₄資源の内、C₄植物とC₃植物を食べた動物のどちらの影響が大きいのかを検証することができる。ただし、骨と異なり、歯は形成時期が早いため、反映している食性期間に注意が必要である。本研究では、授乳や幼少期の食物の影響を避けるため、第三大臼歯を用いて分析した。

動物骨と古人骨の分析の結果、パコパンパ遺跡では、形成期後期にC₄資源（トウモロコシか、トウモロコシを与えられたクイもしくはラクダ科動物）の摂取量が増加したことが示された。さらに、ヒトの歯の分析の結果、タンパク質源の炭素同位体比よりも、全食物の炭素同位体比の方が高いことが示された。すなわち、トウモロコシの摂取が示唆される。また、集団内での社会的差異に伴うC₄資源利用について統計学的有意差は見られず、集団内で食性差があるとは言えない。同時代のクントウル・ワシ遺跡では、金属製品を副葬品に持つ個体で低いC₄資源摂取が報告されており、中央アンデス地帯の北部高地内において、トウモロコシの受容と利用方法が遺跡によって異なっていた可能性が示唆された。ただし、これまでの形成期の同位体分析の多くは骨コラーゲンを用いており、今後はエナメル質中のヒドロキシアパタイトの分析数を増やしていく必要があるだろう。

調査速報（12月4日 9:00-12:20）

9:00-9:20

「トラランカレカ遺跡2016年調査概報」

福原弘識（埼玉大学）

メキシコ中央高原で発生したテオティワカン国家は、それ以前に衰退していった先行社会との歴史的連続性の上に成立している。初期国家形成のプロセスを実証的に解明するためには、メキシコ中央高原の形成期社会を理解することが重要である。テオティワカンは、形成期終末期（前100年~後250年）ごろに都市化し、初期国家へと変遷を遂げた。一方、形成期を通じてメキシコ中央高原に発達してきた多くの集落は、紀元後1世紀ごろと推測されるポボカテペトル火山の噴火やそれに連動した地域社会の衰退と社会的混乱により衰退した。イスタシワトル山麓に位置するトラランカレカ遺跡（前650-後

200/250) は、形成期中期から形成期終末期におけるメキシコ中央高原で、最も大きな都市センターの一つであったが、他の集落と同様、形成期終末期に衰退した。

トラランカレカは形成期中期に利用が開始され、形成期後期に都市の大規模な改変がみられ、形成期終末期に都市が大規模に拡張された。公共建造物が集まる遺跡中心部は、形成期中期から利用され、東西に伸びる舌状台地上に位置する。一方、形成期終末期の都市の拡張では、舌状台地外周の南北に都市が広がった。調査対象地区はこの北側地区の緩やかな丘陵上にある。

本発表では、2016年にトラランカレカ遺跡の北側周縁部でおこなった地形測量と発掘調査の概要を報告した。発掘調査では、南北に30メートル以上の長さを持つ低層の基壇が検出された。遺物構成からは発掘区周辺が居住区として利用されていたことが示唆されるため、この基壇は居住地区における公的な空間の一部であったと推測される。発表ではメキシコ中央高原における社会-政治の大きな変革期における当該地域社会の変遷過程を視野に入れながら、都市の拡張と居住地区における公的空間利用について述べた。

9:20-9:40

「サン・アンドレス遺跡における新たな石造大基壇の発見とその意義」

市川彰 (名古屋大学高等研究院)

本発表ではエルサルバドル共和国サン・アンドレス遺跡において新たに発見された石造大基壇の詳細とその意義について、2016年の調査成果に基づき報告した。

発表者らはマヤ南東端地域の考古編年の精度を高め、メソアメリカ文明の社会変動に関する通時的比較研究の基盤を形成するためにサン・アンドレス遺跡を調査している。2016年は5号建造物を調査した。同建造物は、直径約40m、高さ約13mピラミッドと、それを支える南北約90m、東西約80m、高さ7mの大基壇から成る。この大基壇部分の発掘調査によって石造大基壇は発見された。

石造大基壇は、形状は階段状で、少なくとも4段造り、高さは約6mある。イロパング火山灰のほぼ直上に築造され、古典期後期(600~900年)に主に見られる日干しレンガ(アドベ)の建築に覆われ

ている。このことから後450~600年ごろの所産と推測される。

この発見の重要な点は2点ある。ひとつめは、石造大基壇がイロパング火山灰のほぼ直上に築造されている点である。これはイロパング火山の巨大噴火後、これまで考えられていたよりも短期間で公共祭祀建造物が建造され始めたことを示唆する。ただし、今後は年代測定データや詳細な土器分析結果をふまえて慎重に検討していく必要がある。

ふたつめは、石造建築であるという点である。サポティタン盆地を含むエルサルバドル西部やグアテマラ南部高地の先古典期から古典期前期にかけては土を主たる建築材としており、この石造建築は異質である。時期的に先行もしくは同時期の所産とされる石造建築はエルサルバドル東部に所在するケレパ遺跡でみられる。したがって、イロパング火山の噴火後に、一時的に東部の影響が一気に西進し、伝統的な土の建築にとって代わり、複数の石材を獲得・運搬・建築に運用する知識や技術が導入された可能性がある。また建築の恒久性という点を考慮した場合、その後の時期に、石からアドベに転換するという点も興味深い事例である。

9:40-10:00

「チャルチュアバ遺跡エル・トラピチェ地区の放射性炭素年代測定—マヤ南部地域先古典期~古典期土器編年の再構築にむけて—」

深谷岬 (名古屋大学大学院)

伊藤伸幸 (名古屋大学)

2012年から2015年のエル・トラピチェ地区の発掘調査で出土した先古典期から古典期前期に属する土器の分析と、放射性炭素年代測定の結果を報告した。

チャルチュアバ遺跡はエルサルバドル共和国西部に位置し、先古典期から後古典期にわたる人々の活動の痕跡が確認されている遺跡である。チャルチュアバ遺跡の土器編年は、1978年、ロバート・シャーラーによって発表された。この土器編年は、現在でも指標編年として広く利用されている。シャーラーはセラミックコンプレックスの年代を決定するために放射性炭素年代測定を実施しているが、測定した資料は7点のみであり、年代測定データの不足は問題点のひとつと言える。また2014年には、猪俣健らによりマヤ南部地域を代表するカミナル

フユ遺跡の調査研究に基づいた新しい先古典期土器編年案が提示され、当該地域の各遺跡編年の再考が求められる状況にある。チャルチュアパ遺跡についても、他の遺跡と同様に従来の編年よりも年代が下る可能性が指摘された。

そこで発表者らは、カミナルフユ遺跡同様にマヤ南部地域の代表的な先古典期遺跡のひとつであるチャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で、新たに出土した土器資料を分析し、炭素試料を用いて不足している年代測定データを補い、先行研究で示された同遺跡の二つの土器編年を検証する必要があると考えた。現在も土器の分析は進行中であり、現時点では最終的な結論は出ていないが、本発表では近年エル・トラピチェ地区で出土した土器と年代測定の最新のデータを提示し、マヤ南部地域の先古典期～古典期土器編年に関するデータを示した。これまでに得られたデータは、二つの編年の範囲内に収まる結果となり、精緻化するには至らなかったが、カイナック期とベック期のはじまりについては今後慎重に検討する必要があることが明らかとなっている。

10:10-10:30

「アンデス形成期の神殿後背地研究を始めるにあたって」

芝田幸一郎（法政大学）
宮野元太郎（大阪観光大学）

アンデス形成期に関する調査は、主に神殿遺跡を対象として実施されてきた。これには積極的・消極的双方の理由があるが、いずれにせよ一般居住地・耕作地・採掘地・墓地などを含む「後背地」の調査研究は断片的なものにとどまってきた。発表者もまた、長らく神殿遺跡の調査研究に集中してきたが、神殿に伴う饗宴廃棄物の発見などを契機として、神殿の建設・維持や饗宴への参加・運営を担っていたであろう周辺住民に関するデータ収集の必要性が浮上した。また、近年の好景気や国家的灌漑プロジェクトの進展により、発表者らの調査地域を含むペルー海岸部では耕作地の拡大が著しい。これに伴い、重要性を看過されやすい後背地関連遺跡の破壊は喫緊の問題でもある。

発表者は、ペルー北部アンカシュ県海岸地方のネペーニャ川下流域にて、2002年以来2つの神殿遺跡の発掘を実施してきた。2016年からのプロジェク

トは、これまでの発掘成果や、同時期に行われた他調査隊の成果も利用しながら、ドローンを用いた表面調査によって形成期の後背地関連遺跡と思われるものを絞り込み、その後の発掘調査を充実させるための予備調査と位置づけられる。

本発表では、この8月にネペーニャ川下流域のセロ・ブランコおよびワカ・パルティエダ両神殿遺跡の周辺エリアで実施した短期実験的調査の成果を速報し、併せて海岸地方における予備調査段階でのドローン投入の有効性を示した。具体的には、60-70年代に行われたProulxらのシステムティックな踏査で、前期中間期や中期ホライズンと時期比定された複数の遺跡が、形成期後期に属する居住地および居住地-祭祀複合である可能性が浮上した。また先行研究では未報告の、埋葬儀礼に関すると思われる遺跡も確認したが、これもまた形成期後期と推定されるものであった。これらの小規模遺跡と、主要神殿遺跡との関係を予備的に考察し、今後の調査研究の展望を示した。

10:30-10:50

「コトシュ遺跡第4次発掘調査—コトシュ・ミト期の新知見を中心に—」

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）
セサル・サラ（ペルーカトリカ大学）

1960年代、ペルー共和国ワヌコ州、ワヤガ川上流域のコトシュ遺跡KTマウンドにおいて、東京大学アンデス地帯学術調査団はコトシュ・ミト期（先土器期末期／形成期早期）の神殿建築群を発見した。土器に先立つ神殿の存在をはじめて層位的に立証したという点で、これは大きな成果であった。ただしコトシュ・ミト期の編年研究の遅れは大きな問題として残った。著名な壁面レリーフが出土した「交差した手の神殿」や、白い上塗りをとどめた「白の神殿」といったコトシュ・ミト期の建築は、文化財としての重要性ゆえに撤去することはかなわず、それらの下層により古い建築が埋もれているかどうかは未検証に終わったのである。また放射性炭素絶対年代測定が試みられたが、技術的な限界により、精度の高い測定結果は得られていなかった。そのため、コトシュ・ミト期の開始年代は前2500年、終了年代は前1800年という暫定値が与えられたが、検証されないまま半世紀が過ぎたのである。海岸部で紀元前3000年に近い年代を示す神殿遺跡の知見

が増えた今日、海岸部と山地の神殿の年代を正確に比較することは、文明の形成プロセスを研究する上で必須の課題である。

たとえ発掘が小規模であっても、最小限の炭化物サンプルを採取すれば、東京大学総合研究博物館放射性炭素絶対年代測定室が導入したコンパクトAMSにより、高確度な年代測定が可能である。申請者は共同して2015年8月にコトシュ遺跡で測量を行い、小規模な発掘は十分に実現可能であるとの結論に達し、2016年8～9月に発掘を実施した。KTマウンド東半分においてコトシュ・ミト期の複数の建築が重層的に埋もれており、さらに初めて土器が導入されたコトシュ・ワイラヒルカ期の建築がそれらを覆っていることを確認した。また交差した手の神殿においては、より下層の床面、さらにその下層の床面を確認した。すなわちコトシュ・ミト期の中でも終末期の遺構と、これまでで最も下層の遺構を検出したことになる。各遺構に対応する炭化物サンプルを採取してあり、今後年代測定を進めていく。

10:50-11:10

「『エクアドル地震2016』による文化財被害」

大平秀一（東海大学）

2016年4月16日、エクアドル共和国マナビ県北端部を震源地とするマグニチュード7.8の「2016エクアドル地震」が発生した。これにより、マナビ県ペデルナレス市、マンタ市、ポルトビエホ市などのエクアドル海岸部は甚大な被害を受けている。

国境を越えた文化財保護の支援の可能性を探るべく、2016年9月2日～15日、国際交流基金の主催事業の一環として、「2016エクアドル地震」による文化財被害の実状把握のための調査を実施した（主催：国際交流基金、共催：在エクアドル日本大使館、協力：文化遺産国際協力コンソーシアム）。調査では、海岸部の主要博物館で被災状況を聞き取ったほか、文化遺産庁（INPC）マナビ支庁と、国立博物館を管轄する文化遺産省を訪問して情報収集を行った。

この結果、エクアドル海岸部の大半の博物館で被災していることが明らかとなった。文化財被害は、スペイン侵入以前の社会・文化に属する考古遺物（土器・土製品）に集中している。その多くは展示中のもので、展示ケース内における展示物の落下・

転倒・接触、そして展示ケースの転倒によって破損していた。破損の要因は、展示物や展示ケースの固定が不十分だったことにある。また、展示台にガラスを多用していることも被害を大きくしている。

文化財被害への対処は遅々として進んでいない。地震災害の経験が浅いこともあり、防災マニュアルは存在せず、日本の「文化財レスキュー」のような救済活動も行われていない。考古学者や博物館学者、保存科学の専門家が少なく、救済活動に手が回らないという実状もみてとれた。一方で、対処の遅れの背後には、ラテンアメリカにおける「発見」・「征服」、植民地化、近代国家の形成という歴史の過程で構築されてきた先住民史のポジションの問題も見え隠れする。被災以後、マナビ県では盗掘も急増している。以上の実状を視野に入れ、国際支援の可能性は探られてよい。

11:20-11:40

「メキシコ西部、ハリスコ州ロス・アルトス地域における踏査概報」

吉田晃章（東海大学）

ロドリゴ・エスパルサ（ミチョアカン大学）

フランシスコ・ロドリゲス

（プレサ・デ・ラ・ルス調査団）

本発表は、2016年3月と8月から9月にかけて行われたメキシコ西部ハリスコ州、ロス・アルトス地方およびエル・バヒオ地方における踏査概報であり、吉田が研究代表者を務める「メキシコ西部地域の埋葬文化から探る文明間の交流」（基盤研究(B)：平成26年～28年）の2回目の踏査速報にあたる。本研究は先古典期の埋葬文化に焦点を当てたものであるが、今回は2017年春に発掘を予定している同地域のロス・アガベス遺跡と近郊の岩絵について報告した。同遺跡は、中心部分が6haほどの小規模遺跡で、ペラルタ遺跡などのエル・バヒオ地方に見られる古典期の建築に類似したピラミッド複合を有しており、その影響下にあったことが推測される。ピラミッド状基壇など複数の基壇によって構成される方形の広場の中央には、小さな基壇と思われる隆起が確認されている。さらに大マウンド頂上から南に約100m離れた地点には、直径30mほどのマウンドが二基分布していた。立地の観点から特筆すべきは、周囲には、ロス・アガベスのマウンド以外、目立った建造物が見られない点である。現在、

遺跡を取り囲むアガベ畑には、彩色土器や黒曜石、バハレケが点在していたが、残念ながら踏査では構造物が確認できなかった。

また、ロス・アガベス遺跡から1kmほどはなれた小川の両岸には、多数の岩絵が確認されている。渦巻紋や一筆書きの図像に交じり、複数の刻点で構成される刻点十字紋(pecked cross)が確認されている。この刻点十字紋は、アンソニー・アベニらにより、天文考古学の観点から研究され、テオティワカン文明とのかかわりが指摘されるが、複数の十字が見つかる同地域は、西部地域と中央高原地域の境界上の要衝であることも想定される。さらに興味深いことに、これまで見たこともないようなローカルな刻線画も多数描かれており、同地の重要性が窺える。

ロス・アルトス地域は、古典期中央高原文明の影響が、いかに西部地域に拡大してきたのかを解明するための鍵が眠る重要な地域の一つであろう。

11:40-12:00

「ニカラグア共和国、ラ・パス遺跡(*)の発掘調査」
長谷川悦夫 (埼玉大学)

ラ・パス遺跡は、ニカラグア太平洋岸マテアレ市、マナグア湖の湖畔に位置する。湖の岸辺に、先スペイン期の遺物が広範囲に確認される。この遺跡には、石と土で造営された、直径約20m、高さ2.8mのマウンドがある。メソアメリカ東南辺境のニカラグア太平洋岸で、この規模のマウンドは極めて稀である。その年代、建築様式や建築のシークエンス、機能に関心が持たれたため、報告者は、2015年9月、2016年2-3月このマウンドで発掘調査を行なった。

調査の結果、マウンドの西側の基部で、粗いながらも面を持つ壁を確認した。未加工の石材を積んだものであり、高さ約50cm以上である。ただし、この壁は南北方向に3.3mしか続いておらず、大部分マウンド内部に埋まったままで、未だ全体像は把握できない。いずれにせよ、方形の基壇であることは確実であり、植物の圧痕を持つ焼土塊が大量に出土することから、上部に木舞壁の建物が建てられていたと推測される。

この方形の基壇は、精良な粘土の詰め土と石材(未加工自然石)で覆われ、円形のマウンドが形成される。出土土器から見て、この一連の建築プロセスは、サポア期(後800-1350)からオメテペ期(後1350-1550)にかけてと考えられる。

ラ・パス遺跡の発掘成果で注目されるのは、方形基壇の存在であり、このメソアメリカの文化要素が明確に見られる遺跡はニカラグア太平洋岸では希有である。出土遺物が比較的少なく、炭、灰、動植物遺存体などの生活廃棄物も希薄であることから、祭祀または埋葬が行なわれたと推測される。

ニカラグア太平洋岸は、後800年頃のオトマンゲ語族のチョロテガ、それに続くユト・アステカ語族のニカラオの移住によって言語的・文化的にメソアメリカ化したとされる。ラ・パス遺跡の方形基壇とその後の建築プロセスがこれらの移住とどのような関係を持つのかが今後の調査の焦点となる。

(*)ラ・パス遺跡(La Paz)は、従来パス・イ・レコンシリアシオン(Paz y Reconciliación)と呼ばれてきたが、今次調査から略称であるラ・パスを採用することとした。

12:00-12:20

「グアテマラ、セイバル遺跡と周辺部の航空レーザー測量とマヤ文明の考古学調査」

猪俣健 (アリゾナ大学)

青山和夫 (茨城大学)

フローリー・ピンソン (サン・カルロス大学)

ホセ・ルイス・ランチョス

(グアテマラ国立人類学歴史学研究所)

原口強 (大阪市立大学)

那須浩郎 (総合研究大学)

米延仁志 (鳴門教育大学)

ファン・マヌエル・パロモ (アリゾナ大学)

セイバル・ペテシュバトゥン考古学プロジェクト(団長:猪俣健)と科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」(領域代表者:青山和夫、平成26~30年度)の一環として、グアテマラのセイバル遺跡と周辺部の400km²において航空レーザー測量(LIDAR)を実施した。航空レーザー測量で地形を遠隔探査した後に地上で踏査を行い、これまで全容がわかっていなかったセイバルの都市の構造を確認した。

(1) 航空レーザー測量によって、1万5000を超える考古遺構と考えられる地点を確認した。

(2) 航空レーザー測量図とハーバード大学が1960年代に作成した遺跡の平面図を綿密に比較した結果、密集した二次林においては多少の困難が伴うが、

航空レーザー測量がセイバル遺跡を厚く覆う熱帯雨林において建造物跡の探査に極めて有効であることがわかった。

(3) ハーバード大学の測量ではその平面の形状がよくわかっていなかったセイバル遺跡中心部の「グループA」の巨大な基壇(610×330m)が、明確な長方形であったことがわかった。発掘調査の結果、その大部分が先古典期に建造されたと推測される。

(4) 航空レーザー測量と地上探査によって、「サクベ4」が、「グループA」と「ペック・グループ」を結ぶ長さ570mのサクベであったことがわかった。さらに「グループA」の北で長さ300mの「サクベ5」を新たに確認した。

(5) 公共広場の西側に基壇や神殿ピラミッド、東側に長い基壇を配置した、太陽の運行に関連した儀式建築群「Eグループ」を計11確認した。「グループA」と周辺部のラ・フェリシダ遺跡の「Eグループ」を発掘し、先古典期中期に居住が始まったことがわかった。

(6) 先古典期と比べて、古典期後期・終末期のセイバル遺跡中心部で建造物の密度が高いことが判明した。

(7) 先古典期と古典期の人間の居住は、水はけの良い高台に集中し、傾斜地を農耕に活用していたと考えられる。

研究発表(12月4日 13:50-14:20)

13:50-14:20

「マヤ人は夜の出来事をどのように記したか」

八杉佳穂(国立民族学博物館)

マヤの石碑に記されている日付はほとんど間違いなく正確である。しかしいくつかの石碑に日の表記がおかしいものがある。そのなかで、260日曆または365日曆に一日のずれがある例について考察する。

9.14.17.15.11 2Chuen 14Mol (Yaxchilan HS 3 Step 1)

9.14.17.15.11 3Eb 14Mol (Yaxchilan St.18)(正

しくは 2Chuen 14Mol)

9.14.15.2.3 3Kan 1Kankin (Dos Pilas St.8)(正しくは 2Akbal 1Kankin)

9.14.15.4.14 1Ix 13Pax (Nim Li Punit St.2)(正しくは 1Ix 12Pax)

9.13.10.1.6 7Cimi 3Pop (Emiliano Zapata Panel)(正しくは 7Cimi 4Pop)

これらは260日曆と365日曆の日の数え方の違いを利用して、昼間の出来事と夜間の出来事を区別してあらわそうとした工夫と考える。

民族誌のデータからは260日曆の日は夕方から数えるものであったとみられる。たとえばグアテマラ高地のインルやハカルテコは260日曆の日の始まりを日没から数えた。つまり月の満ち欠けを基本にした曆と考えられる。一方365日曆は太陽の年周期にほぼ一致しており、太陽の動きをもとにした曆と考えると、夜明けから数える曆といえるのではなかろうか。

『カクチケル年代記』に次のような文がある。

chi ka' -i' Tijax x-Ø-b' oq-otäj ul juyu' chi jun Ajpu (174章)

「2ティハシュの日に、フナフプ(アグア)山の土砂崩れがあった」

『カクチケル年代記』は、一年400日の曆を用いて、歴史記述を行なっているが、260日曆の日を利用してあらわしている。それに基づく歴史記述は、マヤ長期曆を引き継ぐもので、長期曆を西曆に変換する式(Ahau数584283説)とよく合う。2ティハシュは、長期曆に直すと、11.16.1.15.18 2Etz' nab 16Zipであり、ユリウス曆の1541.9.10(土)となる。この時代の出来事を簡単に記した『日々の記録Efemérides』によると、アグア山の土砂崩れは9月11日(日)のmadrugadaであったという。ということは、260日曆は日没から数える曆とする考えと矛盾しない。

曆は日より小さな単位(時間)を考慮しないものである。しかし歴史記述においては、一日のある特定の部分に言及したいこともあったに違いない。260日曆と365日曆の日が合わない例は、それをあらわす工夫であったと考えられる。

第21回 研究大会特別シンポジウムの報告

第21回研究大会特別シンポジウム

「古代アメリカに関する高校教育を考える」報告

古代アメリカ学会ではワーキンググループを立

ち上げ、2014年度までに高等学校の世界史の教科書における古代アメリカに関する記述の検討を行った。修正案を教科書の出版社に伝えた結果、いくつかの教科書で学会からの提案が反映された。

これまでの経緯を踏まえ、2015年度から2016年度にかけて、新たにワーキンググループを設置し、高等学校における教育を事例として、古代アメリカ研究の成果をどのように社会還元できるか検討した。本シンポジウムではその成果を報告した。参加者は多々良穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）、市木尚利（リマ日本人学校）、森下壽典（早稲田大学高等学院）、石田春彦（静岡聖光学院中・高等学校）、鶴見英成（東京大学）、渡部森哉（南山大学）の6名であった。なおワーキンググループのメンバーである井上幸孝（専修大学）はシンポジウムには参加できなかった。

新聞や雑誌などでしばしば報道されているように、現在、高等学校や中学校の教員は多忙を極めていいる。そのため教科書や参考書における古代アメリカ関係の記述を現在の研究成果に照らし合わせて正確にしても、それを基に新しい授業を練り直すことのできる余裕のある教員はほとんどいない。またウェブサイトなどで情報発信しても、そこにアクセスする教員はかなり限定されるであろう。科目ごとに指導書というものがあるが、それを活用する教員もそれほど多くないため、その内容を修正したとしても効果は限定的であると予想された。

以上のような現状を踏まえ、本ワーキンググループでは現役教員の意見を参考に、古代アメリカに関する授業案を作成し、それを高校の教員に利用してもらうという方法を検討した。実際に古代アメリカに関係する3つの授業案を作成し、それについて現役の高校教員からコメントしてもらった。本シンポジウムではその内容とコメントについて報告した。また、ワーキンググループのメンバーである市木氏、多々良氏は独自に古代アメリカに関する授業を実践しており、その方法について報告した。両者は当日参加できなかったため、その内容を森下氏、石田氏が代読した。

最後に、古代アメリカに関する情報を用いた授業案を高校教育の現場に提供する方法、課題について討論した。主な論点は次のようになる。

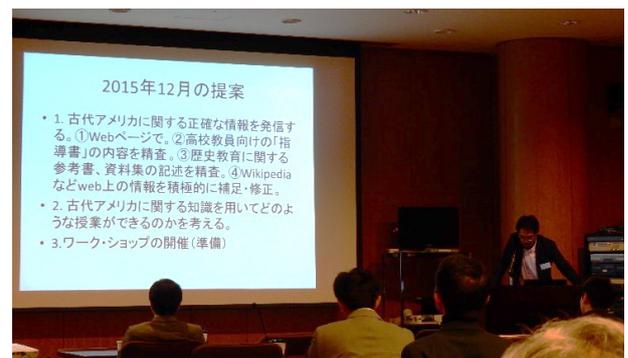
高校における実際の教育現場で使用してもらうためには、アクティブラーニングに用いる授業案や、グループ学習に適した授業案が望ましい。また世界史の授業以外にも、地理、家庭科、総合学習でも使

用できる授業案を提示できるであろう。また個別にゼミを開いている教員もいるので、それに対応した授業案があると良い。さらに主に都市部では学外授業で博物館などを利用することもあるため、その事前学習としての情報提供も有益であろうという提案がなされた。こうした情報提供が有用なのは、教科教育系の学会に参加する意識の高い教員などであろう。

しかし実際に高校教育における授業が、古代アメリカへの関心を引き起こすことが多くあるかというところではない。シンポジウム会場にいた人に問いかけたが、古代アメリカに関心を持つきっかけが高校までの授業であったという人はいなかった。従って、学会における活動は、古代アメリカに興味をもつ人を発掘するというよりは、学会としての社会還元という意味合いが強いであろう。

文部科学省による新しい高等学校学習指導要領の案では「歴史総合」という科目が新設されることになっている。古代アメリカの事例は歴史的思考を涵養するには適しており、比較文明という方向性で学会は動くのが良いのではないかという提案がなされた。こうした試みを通じて、古代アメリカ学会の活動を社会と接合するという意識を高めていきたい。

（研究担当運営委員：渡部 森哉）



シンポジウムの様子

事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

2017年も学会主催の「研究懇談会」(東日本部会、西日本部会)を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

2. 第22回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第22回研究大会・総会を2017年12月2日(土)、3日(日)に茨城大学(茨城県水戸市)において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第20号(2017年12月発行予定)に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集しています。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、2015年12月改定版の寄稿規定および執筆細目(会誌19号・ウェブサイト掲載)をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては、「投稿エントリーカード」の提出が必要となります(2017年3月31日提出締め切り)。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2017年5月20日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読(原稿受領後1~2か月で終了予定)の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。お問い合わせ先:

大平秀一(運営委員、会誌編集担当)

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学文学部アメリカ文明学科

Tel. [REDACTED]

Fax. [REDACTED]

E-mail aant.edit@gmail.com

②会報「42号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字(会報2ページ分)以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員(会報) 福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス [REDACTED]

(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 5月15日(金)

○発行予定 6月下旬

